Japanese Jounal of Applied Psychology
1993, No. 18., 73-95

討　論

「宗教と癒し」

司会　中村昭之（駒澤大学）

シンポジスト

恩田　彰（東洋大学）
J. クスマノ（上智大学）
佐々木宏幹（駒澤大学）
佐々木雄司（独協大学）

このシンポウジムは，平成4年11月28日（土），駒澤大学本館において行われたものである。本報告は，その際の録音テープをもとに，司会の中村が全体をまとめたものである。

中村：それでは定刻の一時になりましたので，ただ今より，シンポジウムを開催致します．私は本日司会を務めさせていただきます，中村でございます．この日本応用心理学会は，毎年一度，公開シンポジウムを開催することを恒例といたしております．できるだけアップ・トゥ・デイトな問題を取り上げております．本年は，「宗教と癒し」というテーマで開催いたします．本日のテーマであります癒しという言葉は，身体と心が病から回復するということを意味するものであります．癒しという言葉の本来の意味については，各先生方がお話になると思います。ご存じの様に最近，脳死，臓器移植，癌の告知という問題，生命，死と医療の問題等がいろいろと議論されております．これらの問題は，生命と死，あるいは人生の生き方といったものを中心課題とする宗教と深くかかわっております。宗教はあらゆる学問の母胎であるといわれております．教育も，医学，そうして心理学も，その母胎から発展してまいったわけでございます。そして現在それぞれがいろいろな問題を抱えております。そこで本シンポジウムでは，そういう癒しの問題を，宗教といういわば原点に帰りまして，そこから現在のありかたを探ってみたいと考えておる次第であります。ここで簡単に，本日の演者の先生方のご紹介をさせていただきます。順番に向こうの方から。佐々木宏幹先生は，昭和30年に駒沢大学の文学部を卒業されまして，昭和40年に東京都立大学のドクター・コースを出られております。ご専門は宗教人類学という領域でございまして，これまでシャーマニズムの人類学とか，人間と宗教の問題といった，たくさんの書物，論文を出しておられます。次に佐々木雄司先生でございますが，先生は昭和32年に東京大学医学部を卒業されました。ご専門は精神衛生学ということでよろしいかと思いますが，東京大学の助手をふりだしに，東京や埼玉の精神衛生センターの所長，琉球大学の教授などを経られまして，昭和60年には東京大学の教授になられました。現在は独協大学の教授でいらっしゃいます。先生は，これまで，『沖縄の文化と精神衛生』，『生命哲学のすすめ』，『宗教から精神衛生へ』，そういった著書を出されておりまして，シャーマニズムの精神医学的研究といった点からお話いただけると思います。次に恩田彰先生は，昭和23年に東京大学文学部を卒業されまして，昭和26年に東京大学の大学院を出られまして，心理学のご専攻でございます。先生は，創造性の心理と禅の心理学，こういった領域の研究家でいらっしゃいまして，それに関します論文もたくさんございます。次に，クスマノ先生は，昭和46年に上智大学を出られまして，その後昭和56年にアリゾナ州立大学の大学院のマスター・コースを出られました。カウンセリングがご専攻でございます。昭和63年にもう一度上智大学に戻られまして，ドクター・コースを出られました。先生はカウンセリングと家族療法，あるいはヨガ，こういったものがご専門でございます。たとえば，家族療法であるとか，『カウンセリングの技法としてのハタ・ヨガ』であるとか，『カウンセリングと宗教』といっ

た著書がございます。以上簡単ではございますが，ご紹介とさせていただきました。それでは最初に各先生方に各々30分位お話していただきまして，その後質疑に移りたいと思います。では，佐々木先生よろしくお願い致します。

佐々木：ご紹介いただきました，佐々木です。本日は宗教人類学という学問を踏まえて，宗教と癒しという問題を考えるということですが，どこまでこの問題の核心に迫れるか，甚だ，こころもとない次第でありますが，自分が勉強してきたことをベースにして，若干の問題を提起してみたいと思います。先ほど，司会者の中村先生がおっしゃいましたように，癒し，ヒーリングというのは何か。実は『広辞苑』によりますとそれは「病であるとか，飢えとか渇き，その他心の悩みなどを治すこと」を意味します。そのように捉えるといたしますと，仏教もキリスト教も，またその影響を受けています民俗宗教（FOLK RELIGION）も，全ては，癒し，治しを志向している。少なくとも大きな役割機能の中には，それらが入るのはむしろ当然であるということになると思います。私は本日の「宗教と癒し」というテーマを，後で仏教とキリスト教という大宗教的立場に立った発言が続きますので，ここでは，人々が様々な病に陥った場合に，宗教がこれを癒すために，具体的にどのようにかかわるか，その関わり方の場面に焦点を置いた話にしたいと思います。そして，具体的，現実的という視点に立ちますと，宗教人類学の立場からは，各地の事例を用いながら皆さんにスライドを通じてその癒しの場面を見ていただくということが大事な説明過程になると思います。人類学にはその成立の当初から現代に至るまで，治療儀礼（キュアリング・ライツ）とか，治癒儀礼（ヒーリング・ライツ）に関する膨大な蓄積があるわけであります。19世紀このかた宗教人類学がおもに対象としてきた宗教は，一般に民俗宗教とか民衆宗教という概念で捉えられているものでありまして，具体的にはある地域の伝統的な，あるいは土着的な宗教形態があって，それに今日では地球上のどこの地域でもそうでありますが，キリスト教や仏教やイスラム教の影響を大かれ少なかれ受けている，そうした複合状態にあるような宗教を，民衆宗教とか，民俗宗教とここでは捉えてみたいと思います。もう少し具体的に申しますと，ある社会の民衆の宗教，つまり民俗宗教とか民衆宗教というものの実態は，仏教，キリスト教，イスラム教とアニミズム，ここでは精霊信仰といっておきたいですが，それとか不思議な力の呪力信仰，アニマテズムとかマナイズムと従来いわれてきたもの，そういうものと重層・習合化している複合的な形態である。従いまして，仏教でも，キリスト教，イスラム教におきましても，民衆に接するレベルにおきましては，多少ともアニミスティックな，または，マナイスティックな性格を持つ。私の調べた限りではそういう風にみえてきましたし，従来の文献でもそういう風にいわれてきました。その辺が取り上げる場面になります。さて，わが国の古典には，僧医，お坊さんのお医者であるとか，また看病禅師，あるいはまた看病比丘・看病比丘尼などの名が多く出てまいります。彼らは文字どおりお坊さんにして医者であり，病気治しのための祈禱を行い，漢方薬を調合し，鍼や灸をほどこしていたことが知られております。この伝統は，後で写真を見ていただきますように，現代にも各地に受け継がれております。後で宗教者による病気治しの事例を具体的に挙げてみますが，その前に従来の宗教人類学における癒し研究の特徴について簡単に触れたいと思います。まず，人類学における宗教と癒しの研究は，長い間，いわゆる未開社会，今日では，無文字社会とか，単純文化社会といわれておりますが，そうした文明の中心から隔絶した地域の民俗を扱う，おもに呪術（マジック）研究の重要な領域として進められてきました。第２に呪術の概念は，宗教の概念，宗教と呪術を２分しての宗教の概念と絶えず比較されて，類別化され，両者の関係や類似よりも，むしろ宗教と呪術はいかに異なるかという点に力点が置かれてきた感があります。しかも，そこで宗教と申しますのは，いわゆるキリスト教でありまして，とりわけキリスト教の教義・教論と比較された呪術論というのが多くみられました。たとえば，19世紀から20世紀にかけての代表的な人類学者でありましたジェームズ・フレイザーは，呪術は宗教に発展する，宗教は科学に進化する，と主張したことは良く知られている事実であります。この進化主義的な志向はなお現代にまで尾を引いております。このため，宗教的・呪術的病気治しと近代医学とは両立しえないのだといった見方を増幅させる一因にもなったと考えております。また，人類学者達は，病気治しの儀礼を詳細に記述・分析し，その象徴的意味や世界観，他界観などとの関係，それから社会生活の面での役割などについては，大変数多くの情報をもたらしました。反面，今日の主題であります宗教的ヒーリングについては，いったいヒールとはどういうことか，どうして病人はお祓いや宗教的扱いを受ければ治ったとされるのか，といった極めて難しい解釈を必要とする問題については，著しい進展は必ずしもみられなかった。これは今日の内的な問題，心理的な問題というものと大いに関係があると考えております。つぎに近代西欧医学の技術や方法の問題が

取り上げられ，現代の病院における医療の方法や，看護のあり方が，社会問題化される状況の中にありまして，宗教と医療との関係がにわかにクローズ・アップされてきました。そこでは宗教的セラピーや宗教的カウンセリングが再び注目されるに至ったわけであります。宗教人類学における病気治しの営みが，改めて見直されるに至った。その伏線として，特に医療人類学（メディカル・アンソロポロジー）というものの台頭と発展の著しい要素を見て取ることができます。これもまた，いままで述べましたような，現代の社会文化的状況を反映しているものと捉えることができます。次に宗教と癒しの問題を考えるにあたって重要なのは，宗教と近代医学とを対比的に，または対照的に捉え，両者は全く関係無いという見方をとってしまうか，逆に大いに関係しなければならない，大いに関係があると論断する，そうした問題ではなくて，両者の関係を現に両者にかかわっている多くの人たちの事例を通じて，様々な角度から，様々な局面について，詳細に検討することが必要であると考えます。こうした手続きを進める上で，宗教人類学的な研究や成果も，また何等かの貢献が可能であると考えております。以下におきましては，まずスライドを見ていただきまして，ヒーリングなるものがどういう場面でどの様に行われているかをご説明したいと思います。まず長崎県五島列島福江島の写真でありまして，ここにみえるのがホウニン（法人）と呼ばれる宗教者，つまりシャーマン的な人なんです。つまり神がかりをすることによって，神様をその身に宿して，あるいはその影響を受けながら病気治しをするという人物です。先ほど私はマナイズムという言葉を使いましたが，これはそうした不思議な力を自らに示現させることができる職能者の家です。ここは弘法大師信仰が宗教文化の基盤になっている地域でありまして，東の高野に対して西の高野といわれております。看板に「高野山大師教会」とありますが，修善庵という所です。一番上に引法大師の像が祀られております。右側が今田修善さんと呼ばれるホウニン，左側がそのお弟子さんであります。右側がクライエント，以下，シャーマンと呼ばないでヒーラーと呼んでみますが，その今田さんの右の人の体の悪い原因が，因縁と呼びますがそれが今田さんに現れております。つまり，様々な象徴的な動きをするわけです。動きには一つ一つ意味があるのですが，ここでは説明致しませんけれども，右の人の体の悪い超自然的原因がこのようにして出てきます。この方は目の悪い人でありまして，病院の医者とともにこのホウニンにかかっております。今若い女性の因縁が出ています。引法大師の像の所に巻いてあります大きな数珠がありまして，その数珠に弘法大師の神秘力が移っており，これで体をさするとか，目が悪い場合には，目の辺りをさすってやると効果が非常にあると言われます。ただし，このホウニンは近代医学を否定致しません。原因となるものは私が取ってあげますが，結果として悪くなった部分はお医者さんにかかって下さいということをいっているわけです。電気療法の資格も取りまして，お年寄りにはかけてあげます。それから，イオン水をつくって信者さんや依頼者に配っておりまして，その配る場合にはイオン水に対して引法大師の祈りを捧げてから，聖なる水に化してあげている。信者さん達がどんどん増えておりまして，弘法大師の誕生祭にはこんなにたくさん，ほとんどが女性でありますが，ホウニンさんによって救われたとか治されたという体験の人がたくさん来まして，こういう風に拝みます。これが発展しますとおそらく小さな教団になるでしょう。つぎにこれは東京の池袋の近くのあるシャーマン的女性でありまして，念力でもって体を指圧して治すという方です。このように自分の手から出る力で，お腹に触ったり，肩をさすったりする。以後お見せする東南アジアの華僑の社会におきましても，同じ様な傾向がみられます。ヒーリング・バイ・タッチといいますか，ヒーリング・バイ・スピリチュアル・インフルアンスといいますか，そういうものを使っているわけです。これはマニラのあるお寺でありまして，医学博士達がやってまいりまして，今，歯をみている人，内臓をみている人，いろいろな医師たちがきています。それがこのマニラの華人街にある大千寺というお寺において行われる儀礼です。ここでは神様，仏様がたくさん祭られておりますが，仏教，道教，キリスト教，イスラム教，その他様々な神像が祭られております。ご存じのように，フィリピンはカトリックが85%という国でありますので，きわめて多様な宗教複合がみられます。阿弥陀さんとお釈迦さんの像がありまして，キリスト教の聖者像もあります。四角のはイスラムの象徴という風になっているわけです。これが日曜の礼拝であります。この方がここの住職，アボットであります。体が悪い人には触れてやることによって，一種のヒーリングを行います。胸が悪い人には胸の辺りをタッチしてあげる。今度はお札をあげますと，お札を燃やしました灰を病院からもらった薬の中に混ぜて飲みます。大変初果があると信じられております。これは儀式の後で，両親や親族は体の悪い者を，この先生に触ってもらいたがるんです。だっこしてもらったりして感謝をする。次に，同じくマニラでありますが，金鸞御苑というお寺です。金鸞御苑では金母娘娘という神様が一番上で，下には幼

きイエス・キリストであるサントニーニョの像がありまして，カトリック国における，華人のお寺であるのがわかります。儀礼の時にはこういう風にやってきます。ブルーの服を着ている人がここの正式会員であります。このように非常に整然として儀礼が行われます。そしてここでは，扶と呼びますが，この左側の人に，神が憑依しまして，その憑依した神の力が，この〇を通じて伝わるわけです。この人がヒールされているところです。合掌のかわりに，こういう形で神様を受けまして，頭の方から体をずっとさすっていきます。水曜日と金曜日にはここの付設クリニックに医学博士達がやってきまして，西洋医学にたった治療をいたします。ほとんどがフィリピン人の人たちが多いわけです。そしてこういう風に診断をいたします。子供達が非常に多いのですが，医師はだいたいフィリピン大学の医学部を出た人たちが多い。これが薬剤部で，様々な薬を調合して与えます。これは血圧を計っているところです。そして，会員になるとこのようなユニフォームをつけます。今度はシンガポールにび飛まして，ある廟におけるタンキーというシャーマン，この人でありますが，そこに病気の子供をつれてきまして，今，ヒーリング・ライツをやっているところです。ここに観音様，その後ろに玄天上帝という病気に効く神様がおりまして，その神が彼女を通じて，子供に効果を及ぼす。このように手をみたりします。東南アジアの華人社会では，神様の符が大変有効だとされておりまして，これに神自らが化身としてものを書きますと，これを身につければ，交通事故にも会わないし，燃やした灰を飲みますと，非常に霊験あらたかであると信じられております。こういう漢方薬をやるところもございます。今度は台湾でありまして，神がかったタンキーがトランス状態において，儀礼を始めたところです。そして，今，病人に対してお祓いをするために，呪文を書いております。この人がお医者さんにかかってもなかなか治らないというので，ここへ来まして治療儀礼を受けております。黒い布をこの人にすっぽりとかぶせまして，そしてシャーマンであるこのヒーラーが，この人に付いた邪気を，この黒の布に移すんです。移したものをすぐに燃やしてしまいます。それでは，今みていただきました儀礼の特徴について整理してみたいと思います。ヒーラーはシャーマニックな人物であるから，神霊や仏から直接治癒力を引き出そうとしている。その力を手でクライエントに触れ，あるいは，外側から影響を与えることによって，クライエントに授けるか，台湾の場合にみられましたように，クライエントの邪気を払うという形をとります。呪力を付した護符を燃やして灰を飲ませるとか，呪力のこもった数珠で身に触れるということをご覧になったと思います。近代医学を根本から否定するヒーラーは私が当たった限りでは，一人もおりません。医学の技術や方法を認めた上で，宗教的な力を与え，元気づける，あるいは，昇華させるといいましょうか，そういう面の働きが多くみられます。台湾におきましても，フィリピンにおきましても，シンガポールにおきましても，癒しと治しというのは，別々ではなくて，同じ空間で相互補完的になされているということがみられます。以下，私の結論でありますが，癒し・治しが有効に働くためには，少なくても次のような条件とか前提が必要ではないかということを申し上げたいと思います。第一にヒーラーとクライエントは，共通の世界観や宗教観，死生観を持っていることが望ましいということです。共通の文化を踏まえた上で，初めてさきほどのようなヒーリングの効果が出るのではないか。第二に，ヒーラーの個人的資質が重要になります。トーリーという精神医学者はヒーラーの資質として，誠実さ，共感，暖かさ，この３つをあげております。これは西欧医学のお医者さんにとっても必要な条件だと思います。誠実であること，相手に共感すること，それから，ウォームス，暖かさを持つこと。それから，第三には，クライエントが，ただかかるのではなくて，なんとかして癒されたい，治していただきたいという切なる期待を持っていること，これが必要である。ただ慣習的にかかったのでは，効果はない。そのためにはヒーラーを心から信頼していることが条件になりますから，第一にあげましたような文化の共有ということが大きくなります。私がマレーシアで調べました，仙医，仙人の仙に医学の医と書いて仙医といっていますが。そこで，主席を勤めている方に私が，「ああいう風な治しは効果があるんですか」といったら，「それはサイコロジカル・エフェクトがこの上なくあるんだ」という説明を英語でしてくれました。彼らもただ拝めば治るんだとは考えていないようでありまして，サイコロジカル・エフェクトというのを，少なくとも幹部達は考えておったようであります。第四に家族や周囲がヒーリングを認め，心から支持していることによって，治しの効果が大きく上がるのではないかと考えております。以上，身と心を二分化して扱うのではなくて，ホーリスティックな対処をすることが，宗教人類学的にはきわめて望ましいというのが，私の事例から学べたことであります。今後のこの研究は，宗教や呪術が有効に働く時と場面を，様々なケースに当たって，まず明らかにしていくことが必要だろう。そのためには，こうした学会の話合いが繰り返し繰り返し積み重ねられていくことが

必要だろうということを申し上げて，非常に大急ぎでやりましたが，私の発表を終わります。

中村：どうもありがとうございました。引き続いて，佐々木雄司先生にお願い致します。

精神衛生学の立場から

佐々木：途中スライドを使いますし，立った方が話しやすいので，こちらで喋らせていただきます。宏幹先生とは昔からのお馴染みで，佐々木というのはシャーマニズムが好きなのかもしれません。本日の私の立場は，精神衛生学です。精神医学の立場とはなっていないわけなんです。ここがみそでございます。今日は４つぐらいのチャプターに分けてお話しようかと思います。最初はまず私の立場について，若干おことわりを致します。第二章で，私のよって立っている専門性を少しお話しようかと思います。それをうけて，第三章で，その専門性からみて，実践の中で，信仰の問題，宗教の問題，癒しの問題はどういった点が気になってくるのかということをお話して，第四章でまとめていこうかと思います。大体そんな構成です。

I. はじめに

最初に，若干おことわりを致します。私に，シンポジストの一人として白羽の矢を立ててくださって，大変光栄に存じております。おそらく，こういうことを期待されているのではないかと思います。現代の医療というのは，科学的西洋医学が主流であり，それがパワフルであるということはいうまでもない。だけど，現代の医療，近代医療というのは，大変問題がある。問題は３つぐらいにまとめられるであろう。まず限界，いくら医学が進んで来ても限界がある。癌なんていうのは早期発見，早期治療しかない。エイズも問題。そういった100%治せるわけではないという問題。それから二番目として，近代医学がこころやたましいというものを置き去りにしていってしまった傾向があるということ。第三として，サービスとしての医療の問題，それこそ，３時間待って３分の診療とか，いろいろなことをいわれております。宏幹先生がいわれたような，誠実，共感，暖かさというのが欠けている。その辺の３つの問題があることは認めざるをえない。一方，癒し，ヒーリングに目をむけてみると，それはそれなりに私どもからみても効果がある。だけど，反面で医療を阻害するという面も持っている。ですから，医療側と宗教側・信仰側というのが，手を携えて，理解と協力が必要である。こんなことを強調しながら，癒しのメカニズム，癒しの精神病理学についても触れる。以上が私に期待された役割だと思います。

しかし，残念ながら，精神衛生学にのめりこんでいる現在の私の頭の中を占めていることはそのへんではなくて，今日は，「たかが医療，されど医療」ということをお話しようと思います。いうなれば，現行医療を再評価していただきたい。もう少し，医療を上手に使えば，もっと医療は使い道があるんじゃないか。もっと限界が狭まってくるんじゃないかということを申し上げたいのです。そして，もう一つおことわりさせて戴くと，本日の私は，精神医学や精神衛生学の代表選手としてお話するんじゃなくて，きわめて個人的な意見となります。

ところで，私が，今，医療といっておりますけれど，医療というのは，科学的医療ともう一つの医療，代替医療，alternative medicine という言葉をよく使いますが，大きく２つに分かれるのではないかと思います[1]。ただし，単に医療といったときには科学的な医療を指すと考えていただきます。代替医療は，伝統的な医療と民間医療の２つに分かれてくると思います。この伝統的な医療というのは鍼灸などでしられる漢方，東洋医学が代表選手。ヒーリングの問題を無理に当てはめれば，民間療法の中に入ってくるのかもしれません。そこで，第二章。

II. 私の視点シャマニズムから Community Mental Healthへ

私は，東大の医学部を卒業致しまして，最初，臨床精神医学をやっておりましたが，ひょんなことからシャーマニズムに興味を持ってまいりました。最初のスライド，これは，恐山でございます。まだ，写真が白黒の時代，昭和33年でございます。次は津軽のシャマン，イタコ。イタコにまつわる話はたくさんあり，話しているとそれだけで終わってしまいます。次をお願い致します。これは津軽のもう一つのシャマン，ゴミソ，通称カミサマ。これは，火渡りの行事，まずカミサマが，火の上を裸足であるき，後で信者さんがぞろぞろとあるきます。そうすると一年間病気をしないですむ。予防医学でありましょうか，わかりません。次は木曾の御嶽山のふもと，御嶽講。平素はいろんな仕事を持っている方がときどき集まって，神がかりの行事を致します。これが中座といいまして，神がかりになります。これが前座といいまして，神がかりを誘導します。その次をお願い致します。中座が神がかりになって，自動書記をして，膝関節が具合い悪い患者さんに対して，治療方法を示しています。次は八丈島。これは精神分裂病の奥さん，ピントはぼかしてあります。一方で医療にかかりながら，巫女さ

んのボスのもとに通って拝んでいる。近代医療との併用。

昭和30年代後半，私達は，いくつかの教団のヒーリングの調査を致しました[2)]。これは有名な全国的な規模の教団，こちらはローカルな教団です。ヒーリングの効果は，いろいろでした。効果があるのもないのも。分裂病でもかなり改善が認められた例もありますし，神経症群に関しては，東大の付属病院よりもはるかに治療効果の早い例もありました。てんかん，これは，一般にはヒーリングでは発作そのものは止まりません。発作は止まりませんけど，人生の生き方になりますと，断然効果が上がり，生き生きと暮らしている，そんな例がございました。

私は，昭和30年代には，こういったヒーリングの問題に真っ向から喰いついておりました。その次をお願い致します。そしてこの頃，私達は，東大の精神科で「神様外来」というのをやっておりまして，信仰に関係のある患者さん，家族に対しては，私どもの研究グループが一生懸命治療に携わりました。その中に沖縄のシャマン，ユタがまぎれこんでまいりました。そのユタの取り持つ縁でハワイ大学の文化人類学の連中が呼んでくれました。女房，子供を連れてハワイ行き。これは総領事館のすぐ裏手にある新宗教。日本から行った一世の尼さんです。ここに日系人のつきものの患者さんが集まってきました。狐がついた，狸がついた，蛇がついた，犬がついたと，全部そろってまして，彼女がばったばったと落とすんです。日本でもみられないようなつきもの落し。明治の初めに，狭い移民船で日本人が苦労して移民しました。その時に，狐や狸もどうも連れて行ったらしい。それからお盆の行事。きれいな風景でございます。

昭和39年に駐日ライシャワー米大使が，分裂病の少年に刺されました。今でも日本はアメリカに弱いですが，その当時はアメリカにもっと弱い時代で，アメリカに申し訳ない，精神障害者を野放しにしてよいのかという声が起こってきまして，精神衛生法が昭和40年に改正されました。それで精神衛生センターというのが全国の都道府県にできて，指導機関となって保健所が精神衛生の仕事をできるようにしようということになりました。日本で，コミュニティ・メンタル・ヘルス，地域精神衛生活動がここではじまることになったわけです。その頃ハワイにおりました。先輩から航空便がきまして，東京に精神衛生センターというのができた。何をやるところだかよくはわからないけれど来ないかという，正直な誘いが来ました。Tokyo Metropolitan Mental Health Centerという名前がかっこいいもんですから，これは社会精神医学の研究所だろうと思い込んで，喜んで飛び込みました。そうしたら本当に地味で大変な第一線の実践機関でした。

スライドを使います〔図1〕。それまでは，病気になったら本人を専門の病院に入院させる，それで治療は専門スタッフがするんだ，よくなるまで入院させておくんだという考え方だったわけです。ところが，1960年代，世界的な動きとして，日本は少し遅れたんですが，むしろ，専門病院だけに任せないで，家族や隣近所の人が，あるいは学校に通いながら学校の仲間やクラスメートやそこの保健センターが，あるいは職場に行きながら職場の同僚や職場の健康管理者などが頑張ってなんとかできないか。保健所が頑張れないか。診療所が頑張れないかという考え方です。ですから，専門病院だけにおまかせではなくて，こういう連中が仲間になってなんとかやろう。いわば，本人をめぐって応援団をつくっていこう。応援団をつくって専門病院とタイ・アップしながら，できるだけ入院させないで，「生活の場」を中心にして考えていこうというのが，コミュニティ・メンタル・ヘルス（地域精神衛生活動）。私は，宗教教団というのはものすごい応援団になると考えております。

現代の医療の中でのコミュニティ・メンタル・ヘルスの一つのねらいは，国民全体，住民全体をどうするかということ。このラグビーのボールは，私の作った大好きなシェーマです〔図2〕。こちら側Aは健康な人，こちら側は健康に問題がある人，これBは，胃癌が始まっている，すい臓癌が始まっている，だけど気がつかない，この辺の人Cは気がついている，体の調子が悪いけれども，恐いとか，お金がかかるとか，時間がないとかいうことで，まだ，何も検査していない。身近なところならなんとか行ける人D。自分の力で専門病院を利用できる健康問題に対するエリートE。ですから，臨床医学の守備範囲はEと，せいぜいD。それに反し，全体の健康を守るというのが，メンタル・ヘルスの立場。そうすると，こういう人たちも（(CBやA）なんとかしなければいけない。そればかりではありません。医療へ行けた人（E, D）も必ずしも全員がうまくはいかない。大体30%位の人はドロップ・アウトします。医者とうまくつながらない。つながらない人をどうやってつなげるか。或はB, Cの人をどうやって医療へもっていくか。そのためには応援団が必要だということになってまいります。宏幹先生も肝臓をこわしておられるんですが，ちゃんと治療をされているかどうか，心配なのですけれども応援団が必要かもしれません。私，昭和41年以来今日まで，25，6年間，こうした立場で，コミュニティ・メンタル

ヘルスの第一線で実践を続けてまいりました[3]。そうすると30年代，臨床をやっていた時に，研究者として，信仰の問題，ヒーリングの問題を手がけていた頃とは異なった側面が気になってきたのです。プラスの面ばかりではないようでございます。

III. コミュニティ・メンタルヘルスの実践の中からみえる“信仰”

1) プラスに機能する場合

まず，プラスの面を２つほどお話いたします。これは大変良い例なんで，何回か私お話したかと思いますし，本にも書いたことがございます[4]。

A子さん，22歳，沖縄の例でございます。若いママさんで，双子の赤ん坊を生みました。そい寝をしておりまして，片方の赤ちゃんを窒息死させちゃったんです。そうしますと，お姑さんは辛く当たります。孫を殺したと。大体姑さんといいますと，嫁さんはかわいくなくても，孫はかわいいもんですから，孫を殺した嫁さんは大変憎らしいわけです。もちろん，本人自身も大変苦しくてたまらない。自殺まで考えたそうです。ご他聞に漏れず，お姑さんにつれられてユタの所へ行きました。そこでユタは赤ん坊を呼びました。生後14日位で死んだんですが，ちゃんとしゃべれるわけです。ユタの口を借りて話をした。お母さんありがとう，自分は水子として流される運命にあった，それを生んでくれてお母さんにもお父さんにもだっこしてもらった，名前も付けてもらった，本当にありがとうと切々と語ったんだそうです。それで，お母さんもおばあちゃんも慰められ，自殺を思いとどまった。こういうドラマティックな変化は，とても健康保険を使った病院ではうまくいかないということを感じるわけです。これは治療そのものとしてプラスに働いたという例でございます。

Bさん，36歳の男性，東京の例。あるキリスト教の教会にせっせと通って，ものすごく一生懸命聖書を勉強しているうち，自分で神様になった，自分に大変力があると思いこみました。そして，どうしてかわからないんですけれどスウェーデンに行きたいと考えはじめました。それで，自分の持ち物を全部売り払ってしまいました。教会に寄付してしまったんです。心配したご両親の相談をうけた保健婦さんと同行して，私，家庭訪問をしたんです。そうしますと，なんにもないんですね。やかんも座布団も布団もなんにもない，がらんとしたマンション。それだけだったら問題じゃないんですが，スーパーに買物に行っても，食堂に行っても，全部教会の付けにしてしまう。勘定が全部教会に回ってくるんです。それで，これはおかしいということになったわけです。お父さんも心配いたしました。私の診断も要医療。なんとか医療につけなければだめだと，私ども，保健婦さん達と悪戦苦闘いたしました。その時力になってくれたのが，その教団の牧師さんをはじめ，幹部の方，青年の方々でした。その教団に迷惑をかけているんです。にもかかわらず，ものすごい応援団になってくれました。忙しいのに集まってはミーティングを繰り返して，なんとか医療につなげようと，努力してくれました。コミュニティ・メンタル・ヘルスというのは，元来はコミュニティを基盤にして治療をする。だけれども，コミュニティがなくなってきております。その中で，この教団は応援団としての役割をしてくれたということをしみじみと痛感させていただきました。

2) お話にもならないという例。C君，中学校３年生，登校拒否。お母さんは，お父さんと相談致しました。どこへ行ったかといいますと，新聞の折込広告に入ってきたお寺へ行きました。まず水子供養をしろといわれました。最初３千円位だったらしいんです。その後いろいろ注文を付けられまして，なんと，３百万円要求されました。それでびっくりしまして，お父さんに相談した。怒ったお父さんが飛び込んで行ったら，３百万円が３万円にダンピングされたということです。すぐ払えなければ，サラ金を世話するとか，住み込み修業をしろとか，そういうことを要求してくるわけです。このケースは，教育委員会関係の教育相談をご紹介しましたが，なかなか難行しています。今日もその相談が午前中ございまして，現行システムでどこまでできるか。どうしたらいいんだろうと首をひねっていたところです。

3) D子さん，女子大生。医療を上手に使えばなんとかなるんじゃないかという例です。高校２年の頃からてんかん発作。さっき，信仰治療ではなかなか治りにくい例としてんかんを出しましたが，これは難治てんかん。大学病院に検査入院しております。高校２年の時に。私は，病気の説明や患者扱いが悪い代表が大学病院という風に，認識しております。彼女の発作がなかなかおさまらなかった。ご作聞に漏れず，なぜ発作がおさまり難いのかという説明が十分にされない。おさまらないにしても，外来治療を続けながら学生生活を送っていけば，なんとかなるんじゃないか，ということを納得しないまま退院しました。どこへ行ったか。あるお寺へ行きました。宏幹先生のいうシンガポールへいけばよかったのかもしれませんが，東京都下のお寺へ行きました。そこでご祈禱を受けました。そこのお坊さんの指示に従って，薬草をのみはじめました。発作はいっこうに止まり

ません。それなのに，なんと大学ではスキー部に入っております。ものすごい勢いで滑るんだそうです。発作が起きたらどうするんだととめているんですが，好きなことをやって死ぬんなら本望であると。それで，お父さん，お母さんは，さじを投げております。

そこで，私どもは，こんな戦略をとりました。まず一段階として東洋医学なら受けてみたいという妥協点が見出されました。それで，私の先輩で東洋医学の大家がいるもんですから，彼に紹介致しまして，しばらく治療してもらった。そして，だんだんと，少しずつ，こちらの土俵にもってまいりました。私の先輩で，てんかんのスペシャリストが，クリニックを開いております。外来診療所，そこへお願い致しました。クリニックですと，大病院とくらべ，一般医者対クライエントの関係がかなりうまくいきます。細かなところまで話が行き届きます。何かあったときも，電話をかければつかまり易い。それから，大学の保健センター側でも，キャンパスという生活の場で，どう生活をして，どう単位を取るかなど，その辺の問題まで話し合うことにいたしました。スキー部もやめました。要するに，「生活の場」での応援団をつくってあげて，「クリニック」というコミュニケーションの付きやすい医療機関を，その中でも「スペシャリスト」を選ぶ。こうすれば，現代医療のもつ限界を，かなり狭めていけると思うのです。それで，発作もどうにか止まってまいりまして，彼女，そろそろ卒業という段階になっております。

IV. おわりに

さて，それでは，まとめに入ります。冒頭に現代医療の問題点を３つあげました。その問題点への対応策として，私，申し上げたいのは，「生活の場」，つまり，職場とか，学校とか，あるいは地域とか，そこの中で健康の問題に責任をもっているキー・パーソンを応援団に付けるということ。それからご本人が医療の上手な活用を工夫するということ。ご本人だけでできなかったら，保健所，あるいはいろんな相談機関を使うこと。こうした努力によって，近代医療の限界，欠点をかなり補えるんじゃないかということです。

それから，信仰治療，ヒーリングの効果として２つ，１つは応援団としてものすごい効果をもつということ，それから，もう１つ。癒しそのものとしての問題，これについては，私，確かに効果はあるけれども，このことがあまりにも強調されてきますと，かえって医療を阻害する因子が表面に出てきて，まずいことが起こってくるのではないかという思いの方が，現在の私の頭の中を占めております。昭和30年代の私は，むしろ効果を真っ向からお話する立場でございました。宏幹先生が言われましたように，確かに近代医療とヒーリングの問題は対立ではなくて併立。信仰の結果として，治ったとか，良くなったとかいうのは私も大賛成なんですが，それを目的として信仰に入っていくとか，それだけにのめり込むというのは，甚だ危険だと思います。沖縄の生活の知恵として，「ナナ医者，ナナユタ，ナナヤブ」という言葉がございます。使えるものは上手に全部使えということ。医療は健康保険で使えます。その辺のところを，今日お話ししまして，問題提起にかえたいと思います。

1) 中山，佐々木「民間療法」，メンタルヘルス・ハンドブック，同朋舎，1989

2) 佐々木「宗教と精神科医療」，精神科治療学Ⅲ，中山書店，1977

3) 佐々木「精神保健總論」，介護福祉士養成講座⑪（精神保健），中央法規出版，1991

4) 佐々木「“宗教”と精神衛生」，こころを癒す―信仰と精神医学―，同朋舎，1988

中村：どうもありがとうございました。それではここで，あまり連続してもくたびれますので，5，6分から10分程度休憩を致しますので，よろしくお願い致します。

それでは時間の関係がございますので，後半のお話に移らしていただきます。それでは，恩田彰先生にお願い致します。

恩田：時間がありませんので，さっそく入らせていただきます。私は禅の立場からお話致します。キリスト教については，クスマノ先生からお話がありますので。宗教的修行によってもたらされるものとして，心理学的にいえば瞑想状態，それは，トランスとか，変性意識状態とか，いわれているものですが，それはセルフ・コントロールに導くということでございます。それによって，心身の病気が治ることがあります。ここでは，宗教的修行としての禅の立場から，宗教と癒しの関係についてお話してみたいと思います。まず，「禅とセルフ・コントロール」ということから入りたいと思います。セルフ・コントロールというのは自己の心身を調整して，その安定と統合をはかり，それによって自己の心身の機能を十分に開発し，そして，その時々の状況にあった適応行動がとれるということでございます。その点，禅というのは調身，体を整え，調息，息を整え，調心，心を整える，ということから成り立っておりまして，禅は，心身を調整する，セルフ・コントロールの方法として捉えることができると思います。すなわち，調身・調息・調心

という面から捉えることができると思います。瞑想といいますか，変性意識状態といいますか，セルフ・コントロールの特徴を取り上げて，お話をしてみたいと思います。まず，第一番目は，注意集中ということでございます。これは一つの事象に注意を集中することですが，身体の動きに注意するものとしては。坐禅では，数息観といって，出入の息を数えて，注意を集中する。これによって，調息，これは，数息観といって調息の法であり，同時に調心，心を整えるという方法であります。調身・調息・調心といいましても，一つのものでありまして，分析するとそういうことであります。これがばらばらになっていては，本当の坐禅，瞑想はできないわけであります。それから，言葉に注意を集中する。こういう面については，禅では禅の公案があります。無字の公案で「ムー」という低い音声，あるいはそれの音にならない内言に注意する。例えば，「父母未生以前の本来の面目」という，お父さんお母さんが生まれる前の自己と何か，頭で考えないでそれに注意を集中する。ちょうど考えてみれば，お念仏とか，お題目とかヨーガの聖音，オームとか，そういうマントラ（真言）に対応するものがあると思います。それから，密教では，阿字観，阿息観，あるいは TM（超越的瞑想法）においても，マントラへの注意集中，こういう面もあると思います。そういう注意の集中ということが，非常に大事であります。これがメディテイションといいますか，それの一つの入口であります。そして，やがて次の禅定（ディヤーナ）の状態にいたるわけです。そこで，それは一つの止観という言葉で，止とは心を特定の対象にむけることで，注意集中に相当します。これは，注意集中から禅定に移る面があって，それから観という知恵が生ずる。すなわち悟りが得られる。そういう面が仏教体系に展開していくわけです。注意集中の問題は，最近，身体のボディー・ワークの問題で言われるし，まず，心の治療は体から入っていく。これが非常に大事な一つのポイントになる。瞑想の一つの要因になるし，治癒の要因になると思います。次は，２番目は，反復練習という問題があります。禅定法（瞑想法）では，簡単な行動様式を設定して，それに注意を集中しながら，何度も何度も繰り返し行います。これは数息観もそうだし，公案の拈提もそうです。そうしますと，一種の変性意識状態（ASC）といいますか，ここでは禅定といわれる状態が起こります。じつは，反復練習という，そういう言葉に余りとらわれるといけないのですが，一つの螺旋の様なもので，だんだん高次の心身の状態に上がっていくわけなんです。これが意識化されないというところが問題です。けれども，我々が繰り返し繰り返し行うということがいかに大事か，我々の心身の機能を高次の次元に持っていくというわけであります。そういう面が非常に重要になろうかと思います。例えば，注意集中というのは，初めは意識しているんですけれども，いわゆる無意識のかたちでできる状態になっていくということであります。坐禅の要訣は，非思量であるといわれています。不思量ではありません。ある事に精神を集中することによってえられる。または，どこにも注意が分散されて，心の動かない状態です。この非思量の状態は，修行によって習熟した状態であります。最初からそうなれるわけではありません。そこに修行というか，繰り返し繰り返しやっていくと，その高次の次元にだんだんと近づいてゆきます。その究極の状態が三昧です。そういう時に気づきが得られる。それが悟りと言われるものであります。この面については，自律訓練法などでもそうですし，繰り返し繰り返しやっているうちに，気づきを得ている。そして，その体の動かし方というか，そういう時はこうしたらいいんだと，体で覚える，気づいてくるということなんですね。そういう気づきを生み出すということが，新しい展開になると思うんです。それから，次は，禅定の問題につながってくるんですが，注意集中と禅定は一応区別する必要がある。これは，ヨーガの体系で，ダーラナとディヤーナ，ダーラナは注意集中で，ディヤーナは禅定です。ディヤーナの究極的なものはサマーディ，三昧という様に分けるのが一つのわけ方だろうと思います。注意集中というのは，一つのことに注意集中しますけれど，禅定の場合は，どこにも注意を集中しない。どこにも注意をしないというのは，あらゆる全てのものに注意が集中されている状態なんですね。ですから，こういう状態が，禅定といわれております。その一つのあり方が，何も考えない，非思量といわれるものであります。これは，外界と対立がなくなって，一つとなった状態で，これを三昧といっています。そうしますと，いままで対立した状態から，自己と外界との対立状態から一つになりますと，非常に自由に心身が動けるようになりまして，心身の機能が十分に働き，そして，治癒も働き，生産的・創造的に活動ができるようになるというわけです。そこで，注意集中の問題は，禅定との比較をしますと，注意集中は心が拡散していくのを調整して，一つのことに注意を集めるというやり方とすれば，禅定というのは，とらわれる心を自由に解放して拡散させていくやり方です。従って，注意集中は求心性を持つとすれば，禅定は遠心性を持つというわけです。そういう面で，禅定は，ある場合においては，人格の統合を壊して，例えば，精神分裂病の場合と

か，うつ病の場合は，非常に危険をもたらす。ですから，瞑想というのは，すべての人に勧めるわけにはいかないわけですね。ある程度指導者のもとでやらないと，危険性があるわけですね。それは，自律訓練法においても，他の瞑想法においても，同じことが言えるわけです。何れにしても，心身の解放系ワークシステムの禅定は，心身を浄化し，ホメオスタシス，すなわち，生物としての均衡状態の回復をもたらしますから，人格の再統合をもたらすという意味で，そこに心身の治療に結び付いてくるわけです。しかし，禅定法は，最初からはやはり難しいので，精神集中，なにか一つに集中していくことから入る。だから，只管打坐は，非常に大事なんですが，これがなかなかうまくいかない，そこで，初期の場合は，数息観から入っていって，只管打坐に移っていく。最初から只管打坐をやってもうまくいかないわけですね。これは大変難しいことですね。ですからそういう一つの道を取る。それで，只管打坐がうまくいかない場合には，数息観でやっていくということは，多くの老師がたがおっしゃっていることでございます。そこで三昧状態になりますと，心身が純化致しまして，気が付かなかったことがわかりますし，今まで環境と対立していたものが一つになった，その境涯でものをみるわけですから，そこに悟りが得られるわけです。悟りとは仏性すなわち自他不二，主客一如の真の自己を把握することです。この場合，自分が無いとわかると，全てが自分であるということがわかる。それが，空といわれるものです。空というのは見方によれば，からっぽだから，あらゆるものが全部はいってしまうんだというんです。一切の事象は，その中味はからっぽであり，しかもその中から，あらゆる無限の働きが出てくる。ですから，昔の言葉で，「無一物中　無尽蔵　花有り　月有り　楼台有り」という，空の境涯からあらゆるものが現れてくる。いわゆる自在の行動が現れて，そこに，自律性，治癒力が現れ，創造性も現れてくる。こういうことになろうかと思います。次は暗示の問題です。色々あろうかと思うのですが，一つの宗教的な儀式とか，儀礼というのが修行にはある。行動の目標を設定するということがあるわけです。その点，他者からの暗示ではなくて，自己暗示，自分で行動の目標を設定する。そうしますと，自分の可能性といいますか，潜在能力を開発していく，こういう面が一つあろうかと思います。曹洞禅では，坐禅によって禅定を深め，あるいは臨済禅では，公案に注意を集中し，さらにそれを放下（忘れて）して，禅定を深め，定力を高める。そしてそこに気づきがあり，真の自己をつかまえる。目標設定というのは，場合によっては，信仰というか，祈りにもあります。祈りは，実現するんです。例えば，「衆生無辺誓願度‥」といった四弘誓願文をとなえます。いわゆる，戒律の戒ですね。戒定慧の，戒というのは，自己コントロールのことです。そこに一つの自己の，目標設定という自己暗示の問題が入ってくる。心に念じたものが実現するということですね。そういう面はあると思います。それから，心身の安定の問題です，この禅定法によって，心身のよけいな緊張が解放され，緊張と弛緩のバランスがとれてくる。そういう面から，心身の安定が現れる。そして，洞察が得られ，自己実現，あるいは創造性が開発される。それから，固定概念が壊されまして，いろいろな自由なものの見方が，拡散的に広がっていって，多面的にものが考えられる。そういう面も出てくる。治癒力もそこから現れてきます。そこで，次は，健康性の開発です。その心身の安定が得られれば，当然，心身のホメオスタシスが促進致します。時によって，自律性解放とか，自己正常化というのが，起こります。私もそういうことを体験したことがあります。それで，非常にさっぱりして，ストレスが解消してしまうということもあるわけですが，もちろん，禅はそれを目的とするわけではないんですが，その状態というものがそういう状況を作り出すことがあります。ですから，自然治癒力が高まります。それから，心身のエネルギーが，禅定に入って開発して，それが治癒力につながってくる。それから，大脳の新しい皮質と古い皮質，それから脳幹とのバランスとか，自律神経系の，交感神経と副交感神経とのバランスが得られます。交感神経が禅定によって鎮静しますので，副交感神経の働きが活発になって調整が得られるとか，そういう面が出てきます。次が，創造性が開発するということです。最近の医学や心理学の研究では，大脳の半球，左半球と右半球が一つのバランスがとれて，そこで左の方は，言語的な論理的な思考，右の方は，直観とかイマジネーションの働き，このバランスがとれてくるというようなことですね。例えば，右脳の開発で直観的思考が開発されて，左の方で論理的思考でまとめていくと，創造的思考が出てきます。右の方でイメージが出てくる，いわゆる音楽とか，美術の面ですね。そしてこれを思考でまとめていく。両方の相互作用が禅定によって促進される。もう一つ，もっと深いところで，結び付ける，なにか統合の働きがあるのではないか。ただ左半球と右半球との結びつきではなくて，むしろ，大脳辺縁系とかそういうもっと深いところで，左半球，右半球を統合していく。そういう大きな働きが禅定にはある。そういう面で，創造性の開発にもつながっていくんじゃないかと思います。次

に時間をもう少しいただいて,「禅と」カウンセリングの問題について，話してみたいと思います。禅とカウンセリング，心理療法との関係ですが，もちろん両者は目的と方法は違っているわけです。しかし，ここにまた共通点もあるし,相違点もある。従って,お互いに補完的な面もあります。そういう面をちょっと考えてみたいと思います。時間も無いので，ポイントだけをお話させていただきたいと思います。第一番目はですね,カウンセリングもそうですが,禅の場合，ここで一つ出てくるのが,心的エネルギーが開発されるということです。非常に意欲が出て積極的に行動ができる。こういう面があります。カウンセリングの場合でも,感情解放とか,苦悩から解放されていく,それで安心感が得られる,そうすると心的なエネルギーが出てくるという面もありますし，それから，禅定といいますか，坐禅をやっていますと，緊張と弛緩のバランスができ，それから，心身の安定が得られて，心的エネルギーが開発される。こういう様な面があって，治癒力につながっていくと思います。それから，次は，現実の直視と真の事実の気づきということです。現実的に見るというのはあるがままに受け取る，ここに偏見とか歪みとか合理化とか,そういうのがなくて,あるがままに受入れることができるようになることです。これは，真の事実の気づきとかいっております。例えば，趙州が南泉に「道は何か」という問うたのに対して，南泉は「日常やっていることそのことが道なんだよ」とこたえている。あるがままに現実というものを直視して,そして,その真の事実に気づいていく。真の事実という場合には，ただ客観的にものをみるというのではなくて，主観と客観が分かれる以前の状態ですね。主客合一，自他一如というか，そういう面の真の事実であります。これは，知的な理解ではなくて，体験によって気づくことです。ですから，あくまで，禅の場合でも，カウンセリングによって得られるクライエントの体験も，体験の中から気づいていくことです。それから，次は，現実的反応と禅機です。禅機というのは，三昧を体験する時のより自由に生き生きとした，創造的な働きという意味なんですが，現実的反応というのは，これはある対象に全力的にぶつかっていくということですね。これは，道元禅師が正法眼蔵の坐禅儀の中で,「頭燃を払うがごとく坐禅を好むべし」と説いておられる。頭燃を払うというのは，髪の毛に火がついたら一生懸命に消すことです。そのつもりで坐禅をやれということで，命がけでやれという言い方もできるかもしれませんが，いわゆる三昧の状態ですね。これはやっている本人自身気づいていないかもしれませんが，いわゆる一生懸命やっている状態です。もちろんこれは，気づこうと思えば気づくことができる状態であります。こういう状態では，不思議な力が出てくる。それが禅機ということなんです。例えば，鍵の公案で,「鍵の穴から入ってこい」という公案があります。そういう場合は普通できない。鍵の穴から入るなんていうのは難しい。だけどもこれは禅の境涯では自由自在に入れます。出たり入ったりできるわけです。これは行動でも表すことができるわけです。そういう様な体験ができるようになります。それから，カウンセリングにおいてもですね，対象に一体化して，あるがままの体験で自由に動けるということで，現実的な反応があるがままに行動できるようになると思います。次は多値的な物の見方ということです。これは，多くの見方が価値を持つというのですから，我々は，これが良いとか悪いとか，対立的なものの見方でみているんですが，これが一つになった世界で，これを感じ取ることができると，非常に自由に動けるようになる。それから，もののアイディアを出すのでも，たった一つの道だけではなく，いろんな道があるんだということ，いきずまってもみんな道が打開されていくという境涯ですね。それは対立的に感じられたものが，一つになってしまう。例えば，自分以外のものは自分だという感じになって，ここに佐々木さんとかいろいろといらっしゃいますけども，私は誰かと，私は佐々木ですと言えるし，私はクスマノですということもできるわけです。そういうふうに自由自在になります。これは，禅では公案などにも出てくるわけです。あらゆる場合，世界と一体ですから，私は宇宙と一つ，そういう意識ですから，自由自在になりうるわけです。それは，カウンセリングでいえば，自己受容という，自己の心の状態を受け入れるようになると，他者も受け入れられる。こういう一つの境涯に展開されてくるわけです。これはあくまで頭で考えた世界ではなくて，体験においてつかめるものであります。それから，自己の探求ということなんですが，これは禅の場合には，真の自己という，これは非常に難しいのですが，禅で探求する場合と，カウンセリングの自己というのは，必ずしも一致するものではないと思います。禅のいう真の自己というのは，自他一如，主客一如，すなわち，主観・客観，自と他が分かれる以前の状態ですね。これは仏教でいう本質の世界，仏性ですが，本質の世界での真の自己を言っているわけです。それは我々ならば，条件というものが発生する以前の自己なんですね。条件発生以前の自己とは何か。それは見えないし，とらえることもできない。そういう世界なんですね。これをつかむというのが，悟りですね。それに対して，カウンセリングの真の自己というのは，

現象の世界の自己でありまして，自分と他者はやはり対立している。これは条件発生的な自己ですから，我々が見ることもできる，聞くこともできるし，つかむこともできる，という風な世界ですね。これは実は考えてみれば，我々は出来上がっていると思っている。だけれどもそれは，出来上がる前にずっと降ろしていきますとなんにもない世界になる。そういう次元は，一つの世界ですから，禅では空といっても，それは縁起の世界でいえば，こういう条件によってこういうものが成立しているよ，現象が出てくるよ，ということを説いているわけですから，この両面が仏教でもあるし，カウンセリングの場合でもある。現象であるけれどもそれをずっと降ろしてくれば，自分と他が一つになる。最近来られましたクラーク・ムスターカス先生が，実存心理学で実存療法をやっておられる方ですが，私の考えを引用されて報告されていました。また，松尾芭蕉の例を挙げておられたのですが，結局，松のことは松に聞けと，竹のことは竹に聞けと，従って，クライエントのことはクライエントに聞けと，こちらのあるものの見方で見るんじゃなくて，そのものから見て感じ取ることです。それには自分が，空というか，無にしていないと，こちらに何か一物があれば見えないわけですね。こちらがからっぽになっているから，あらゆるものが入ってくるわけです。こちらに何かがあると，詰まってしまって入ってこない。からっぽにするとすっとはいってくるわけです。これはちょうど，磨いた鏡に全てが写るように，そういう様にすっと入ってくる。こういう問題というのは，禅もカウンセリングも同じであると思います。ただ強調点が，禅の方は本質の世界をとらえるし，カウンセリングの場合には，現実現象の世界を強調しているに過ぎないのではないでしょうか。しかし，基本的には，両面から考えられる。違いはあるけれども，本質においては同じことではないかなあという感じがいたします。自己の体験というのは，禅もカウンセリングも体験の世界から出ているので，そういう面で，自己受容といいますか，こういう面が非常に大事なことです。それから，無条件に，これで良いんだという，無条件に受容できる，そういうところから，あらゆる安心感が得られる。そういう体験から，いろいろな気づきとか，イメージが出てくるということです。それから，自己責任感の問題なんですが，禅においても，カウンセリングにおいても，自分が変わるということ，こうなった，あるいは，これからこうなるというのは，自分の責任の自覚において行われるものだということです。誰がさせるものでもない。病気でも，悲しみでも，苦しみでも，みんな自分でつくったんだと，そういうことがあれば，それを治すのも自分なんだということであります。そういう点では，唯識論においてもですね，これは仏教の実践，瞑想の実践体系から生まれたもので，全ての現象は自分がその意識において，つくりだしているものだということに気づくことが大事だということを申しております。そういう面を，我々は教えられる面があると思います。次に，心理的自由の問題なんですが，ここで私達は，カウンセリングの場合においては，いわゆる心理自由というのは，行動的な自由というのは私たちは動けば現象的にぶつかるのですが，心の自由というのは無限です。自分の中の自身から解放されることなので，そういう面においては，自己のとらわれから脱却していく。私たちには，かなり思い込みというものがあるわけです。例えば，「無門関」の関という関所があるわけですね。関所というのは外にあるのではなくて，自分の心の中にある，しかも，自分でつくっているわけです。従って，門がないのに，門がある。関所が無いのに関所があると，自分で思い込んでいるわけです。そういう思い込みを取ってしまえば，自由自在に動けるということなんですね。これが案外人間というのは，病気もなんでもそうだと思うんですね。そういうものだから，私たちは自由におれるのを，脱却できるのを，自分で勝手にこれは関所だ門だと，これは制約だと，勝手に思い込んで自分をしばりつけている。もちろんこれは行動的には制限があるし，法律はあるし，ぶつかれば門があるし壁もある。しかし，錠があれば鍵で開けて出るし，それから，交通規則はきちんと守っているとぶつからないで済む，そういうことになるわけですね。ですからそれは決して矛盾したことではない。一方は本質的な世界のことをいうし，一方は現象のことをいっている。これが裏腹になって一つの世界を構成しているのであります。時間が過ぎましたのでこんなところとで。

中村：どうもありがとうございました。それでは最後でございますけれど，クスマノ先生にお願い致します。

クスマノ：クスマノです。日本応用心理学会のシンポジウムに招いていただきましてありがとうございます。みなさんお疲れのところでもあるし，私，皆さんの方からの質問とコメント，ご意見を楽しみにしておりますので，私に与えられた30分の時間を少し短くして，早めに終わらせていただきたいと思います。そしてこちらの学生，岡田容子さんですね，心理学の博士課程の人の協力をすこししてもらって，今から話を進めていきたいと思います。原稿を作っておきましたのでそれにそって話をしますが，途中で適当に自分なりの解説を加えたり，事例を入れたりします。宗教と癒し，キリスト教の立場か

ら。序論。このシンポジウムの一つの課題は，癒しという現象と心理療法の関係を明らかにすることであります。そして私に与えられた課題は，キリスト教における癒しを説明することであります。そのためにキリスト教の原点，つまり，聖書の中のイエスの癒しの記述を使いながら，説明してみたいと思います。イエスが人を癒す３つの場面を紹介し，キリスト教の癒しの立場を述べてみたい。理解をたやすくするために，身体的な癒し，精神的な癒し，そして霊的な癒しと３つに分けましたが，この３つ，身体，精神，霊のレベルは，分けて考えることはできないし，イエス自身はいつも人を癒すとき，全人的に，その人をとらえて，癒していました。そこで３つの聖書の話を，この癒しの箇所を説明した後，私があげた問題に戻りたいと思います。ホーリスティックなアプローチが大事だと思います。聖書における癒し，一番。身体的癒し。次の短い話の中に，イエスの身体的に病んでいる人の癒しの描写があります。岡田さん，お願いします。最初の箇所は，マタイの福音の８章からです。短い箇所です，お願いします。

イエスはペトロの家に行き，その姑が熱を出して寝込んでいるのをご覧になった。イエスがその手に触れられると，熱は去り，姑は起き上がってイエスをもてなした。

ここで指摘すべきところは，イエスは按手によって癒したことです。それは彼にとって，一番好まれたやり方であったと思われます。このところでは，この癒しは，ごく普通に行われております。聖書の他の場面では，例えば，眼の不自由な方，足の不自由な方，死者を蘇らせたという劇的な場面もあるんですが，この場面はそれとすごく異なります。また先ほど読んだ聖書の場面では，より高い次元を象徴してはいない。聖書の他の場面では，例えば眼の見えない方が，癒しをいただいた時に，それは，心を開かれて，信仰を抱くことができるようになったというところも象徴しております。先ほど岡田さんが詠んでくださった場面は，そういう色彩はいっさい入っておりません。単なる身体的癒しです。またこの箇所では，イエスの親しい人の家族の一人を身体的な苦しみから解放しています。イエスの友達の一人でした。その人のお願いに応じて癒したと考えられております。イエスにとって，身体的に苦しむ人への癒しは，病人の苦しみに対する同情の現れであります。そしてそれはイエスの癒しの特徴の一つであります。後でまたそれに触れたいと思いますが，イエスの癒しは，決して形式的なものではありませんし，他の人のために行われることでもありません。心からの癒しです，いつも。それは特徴だと思います。2，精神的な癒し。次の話では，精神の障害を持った人へのイエスの癒しであります。当時の人々が精神の障害は悪魔からくるものだと思っていたので，この話ではそうした表現がみられます。しかし，記述されている病状をみれば，明らかに悪魔つきではなくて，精神障害とわかります。皆さん，これからの聖書の話を聞けば，すぐ，そういう精神障害であるとわかると思います。この話の中にはいろんな飾りものがありますが，ほんとに純粋な精神的な癒しです。じゃあ岡田さんお願いします。ルカの８章からです。

一行は，ガラリアの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると，この町の者で，悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間，衣服を身に着けず，家に住まないで墓場を住まいとしていた。イエスを見ると，わめきながらひれ伏し，大声で言った。『いと高き神の子イエス，かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。』イエスが汚れた霊に男からでる様に命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので，鎖でつながれ，足枷をはめられて監視されていたが，それを引きちぎっては，悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。イエスが，『名は何というか』とお尋ねになると，『レギオン』と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである。そして悪霊どもは，底無しの淵へ行けという命令を自分達に出さないようにと，イエスに願った。

ところでその辺りの山で，たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと，イエスはお許しになった。悪霊どもはその人から出て，豚の中に入った。すると豚の群れは崖を下って湖になだれ込み，おぼれ死んだ。この出来事を見た豚飼いたちは逃げ出し，町や村にこのことを知らせた。そこで，人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると，悪霊どもを追い出してもらった人が，服を着，正気になってイエスの足もとに座っているのを見て，恐ろしくなった。成り行きを見ていた人たちは，悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。

ありがとうございます。私は，カトリックの司祭ですが，15年ぐらい前ですかね，カトリックの司祭になる前に，鎌倉の栄光学園で何年か教えたことがあります。司祭になったばかり，一度戻って，昔の教え子達に聖書の話を少しやりたいと思って，この箇所を使ったんですね。一生懸命説明して，イエスの力とか奇跡とか，いろいろなことを説明したら，終わったり中学生の反応は，『豚はかわいそうでしたね，先生』。ここで指摘すべきと

ころは，その人を煩わしている悪霊の名前を知ることによって，イエスは全てを支配したということです。イエスは悪霊と会話をして，癒される人と全く別の存在であるかのように悪霊を取り扱う。悪霊は抵抗なくイエスの支配に従う。精神障害を持っていた人が完全に正気に戻る。この癒しを目撃した人々は，恐怖にかられた。彼らの反響が暗示するのは，その人の問題がどれほど重い状態であったか，イエスがそれをどれほど簡単に治したかということであり，この人をとらえていた精神的障害という絆をイエスが解き放ったということであります。この話では，イエスの癒し方のもう一つの特徴が表されています。それはイエスが自信をもって，精神障害に直面し，最も重病の精神病に対しても，自信を持っていたことであります。これはまた，特徴ですね。ありとあらゆる病気に対して，イエスは非常に自信をもって取りかかったということだと思います。第3，霊的な癒し。3番目の話では，イエスは人を霊的に，つまり，罪の許しによって癒す例であります。福音の他のところでは，イエスはまことの癒しは霊的な癒しであって，前の2つ，つまり，精神的な癒し，あるいは身体的な癒しは，単なる罪の許しの権能をイエスが持っていることの印であると説明がなされています。次の箇所では，罪の許しによってイエスは女性を癒す。これはヨハネの8章からです。お願い致します。

そこへ立法学者たちやファリサイ派の人々が，姦通の現場で取り捕らえられた女を連れて来て，真ん中に立たせ，イエスに言った。『先生，この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと，モーゼは律法の中で命じております。ところで，あなたはどうお考えになりますか。』イエスを試して，訴える口実を得るために，こう言ったのである。イエスはかがみ込み，指で地面に何か書き始められた。しかし，彼らがしつこく問い続けるので，イエスは身を起こして言われた。『あなたたちの中で罪を犯したことのない者が，まず，この女に石を投げなさい。』そしてまた，身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は，年長者から始まって，一人また一人と立ち去ってしまい，イエス一人と，真ん中にいた女が残った。イエスは，身を起こして言われた。『婦人よ，あの人達はどこにいるのか。誰もあなたを罪に定めなかったのか。』女が，『主よ，誰も』と言うと，イエスは言われた。『私もあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは，もう罪を犯してはならない。』

ありがとうございます。ここで注目すべきところは，この女性は，身体的，精神的な病はみられない。ユダヤ教で教えられた神の掟を破ったということだけであります。ことにユダヤ教の律法には，その罪のための許しはない。しかしイエスは，自分は律法よりも権能をもつ。そして彼女に許しを与えて，彼女を癒す。それによって自分の罪が許されることは，癒しの最大の現れであることを示しております。ディスカッションの方に入りたいです。イエスの生活の中で，癒しの活動は大きな位置を占めています。イエス の生涯の記録の5分の1は，40件の癒しの場面と，それについての論争であります。後のキリスト教の記録に初代のキリスト者は，特に病人を見舞うことによって，イエスの癒しの活動を継続してきました。初代教会の教父達，例えばアウグスティヌスは模範に習って，病人を見舞って按手した。中世期になると，身体的な癒しの為に，キリスト者達は病院を建てた。それが現代に至るまで教会の活動になっています。精神的な癒しでは，精神的なストレスをやわらげるために，また精神的な健康を向上するために，司祭と牧師は，信徒と祈ったり，話したりしています。霊的な癒しについて言えば，罪の告白と罪の許しは多くの人に多くの癒しをもたらす教会の秘跡であります。その上にキリスト者は，どこでも自分のため，また，他者のために，癒しを毎日願う習慣があります。このようにキリスト教では，イエスが生きておられたときから始められた，身体的，精神的，霊的癒しの活動を，信徒達が継続しているのです。最初に述べたように，さらにここで強調したいのは，キリスト教における癒しは，単に，身体的，精神的，霊的の一部分の癒しとなることはなく，その人の存在そのものを対象として癒されることであります。結びになります。現代の心理学との関係。このキリスト教で言う全人的存在のアプローチは，現代のホーリスティック健康的アプローチに良くあっています。ホーリスティック健康の見方では，身体的，精神的，霊的な人間の健康は，絡み合って相互に影響を及ぼしあっていると考えます。実は，WHO から最近出された健康についての定義は，その3つの側面が含まれています。特に人間の精神的な健康を取り扱う心理学者が忘れてはならないことは，精神的な健康は，身体的な 健康と 霊的な健康と切り離すことはできないということです。それは先ほどの話の中で 問題提起 として 出したことです。私もよくカウンセラーとして 活動しておりますが，それを 実感しております。人の 精神的問題 はそれだけを 取り扱うのは難しい。身体的癒し，霊的癒しも必要としています。精神的癒しを求めて，私達のところに来る人たちに，その2つの側面が影響を及ぼしているということを，自覚して対応することが大切であります。このよう

に，人間をみるためには，キリスト教における人間の見方が役にたつかもしれません。最後に，このシンポジウムを企画してくださった中村先生から，質問が出されて，キリスト教においては，癒しの要因とメカニズムについて少し話して下さいということでしたが，原稿ができてからこの願いがきましたので，少しだけ付け加えさせて下さい。私の考えでは，キリスト教においては２つの側面から成り立っています。１つは癒してもらう人の努力ですね，あるいは，心の態度といいますか，心構え，ある程度まで必要だと思います。しかし，最終的にキリスト教の考えでは，すべての癒しは神様からくるということです。なぜなら，神は命の泉でありますので，最終的に全ての癒しはそちらに還元されることになると思います。だからといって，癒す人の技術とか，癒される人の心構えが必要ではないとか，そういうことはありませんが，また医療の技術も必要ですし，全ての手段を通してその癒しが与えられるけれども，最終的な要因といいますか，メカニズムは神のところにあるとキリスト教の多くの方が信じているようだと思います。大変つたないお話で皆さんの期待にあまり答えていないかもしれませんけれど，ご参考まで。どうもご静聴ありがとうございました。岡田さんどうもありがとうございました。

中村：それでは４人のシンポジストの先生方の一応のスピーチを終わりました。先生方の中でもう少し残っているものがおありではないかと思うのですけれど，それをまずお聞きしたいと思うのですけれど，佐々木先生いかがでしょうか。

佐々木（こ）：先ほど，シンガポールの例でありましたが，シャーマンが病人を相手にしたときの写真をお見せしました。これにはやりとりがあるわけですね，ヒーラーとクライエントの。ちょっとそのやり取りを申します。女性で65歳の人ですが，そのクライエントが，「私は胆石で苦しんでいます。医者が申しますには手術して胆嚢から胆石を取り出す必要があるとのことです，私は60を過ぎて老齢でもあり心配です，医者の手術を受けるべきか否かご判断をお願いします」。家族と相談したけれどわからんというので，こういう問題を先ほどの廟にもって行きます。そうすると，神様になりきっている先ほどの女性タンキーが，「余り水を飲んではいけない。水はこの病気には良くないからだ」。果してこれはその通りなのかどうか佐々木（雄）先生から聞きたいのですが，胆石に水が悪いかどうかわかりません。医者が手術を勧めていることについては，「なんの心配もいらない。自分で進んで手術を受けなさい」。そこで依頼者。「こんなにからだが弱っていても大丈夫でしょうか」。神は「心配することはない。手術の当日には，私はその場所に行って，あなたを守ってあげる。何も悪いことは起こらないだろう。手術によい日を選び，医者と相談して，その日が決まったら私に教えなさい。手術の開始の時刻も教えなさい。私は病院まで出向きあなたを守護し手術を成功させてやろう」と述べる。そして先ほどの３枚の神様の札を作ってやって与えながら，「手術当日，感天上帝が」，感天上帝とは自分のことを言っています，「安全な手術の実施と，速やかな回復を願ってあげる。なんの心配もいらない。進んで手術を受けなさい。この３枚の神符は，服用すれば，あなたの手術に対する恐怖心は消える，やがて健康に恵まれることになろう」。依頼者「ありがとうございました」。こうしたやり取りが，外からみましても，精神を強化し，浄化し，安定して手術を受けるのに相応しい状態にする。今の日本の病院では，こういう思いやりというのか，が無いのに対して，あるところもあるかもしれませんが，大きな意味をもつと考えるわけです。簡単にもう一つだけ。38歳の女性。「私は子宮に癌があります。体がだんだん衰弱してきています。医者はすぐにでも手術をすべきだといっていますが，自信がなくて悩んでいます」。神「以前にも子宮癌で悩んだことがあるから，これで２度目だね」，云々とありまして，「私は手術が円滑に行われ，成功し，回復が早まるよう力を与えてあげる。手術が始まる前に，南無観音菩薩と唱え，円滑に手術が運ぶように，術後の回復が早いように，長寿を与えてくれるように祈りなさい，私もまた49日の間，感天上帝の弟子として，あなたを守護するように唱えごとをしよう」。依頼者「私が入院する病院は，トアパーヨー病院の５病棟３階ベッド33号です」。神「心配するな。この神符は，神の札です。あなたの手術を保証し，自信を与えるであろう。あなたの手術当日には，私はその病院にいってあなたを導き守護を与えよう。手術後には，鳥の肉，肝臓，腎臓，エビ，カニを食べてはならない。人参，キャベツ，はな野菜，黒豆のような野菜を多くとりなさい。ただし，果皮，果物の皮など消化に悪いものは食べるな。果物を多くとりたくさん水を飲みなさい。手術後は十分注意し，規則正しい生活を守るように。手術が始まる直前に，南無感天上帝と３度唱えなさい」。「ありがとうございます。言われましたことを実行し守ります。どうか私をお守り下さい」。「承知した。私はあなたに心の平安を与えよう。そしてあなたを導いて，万事うまく行くようにさせよう。信仰を持ち，物事の明るい面を見なさい。私はあなたの健康をこのうえない状態になるようあなたを援助しよう」。「ありがとうございます」。こういうやり取

りですね，先ほどは絵だけお見せしました。

中村：どうもありがとうございました。いま佐々木雄司先生にお尋ねになったんですけれど，佐々木雄司何かご発言，それから，先ほど，時間がありませんでしたから，もう少し何かおっしゃっていただければと思うのですが。

佐々木（ゆ）：はい。今の宏幹先生のシンガポールのお話ですが。見事な医療相談だと思います。今度そういう講習会があったら講師で呼びたいようなタンキーです。水を飲むなということについては私専門違いなのでどうなのかよくわかりませんが，宏幹先生はビールが飲めればまあいいんだろうと思います。さっきの報告で私はひねくれたこと，ヒーリングを話題化すること自体の危険性を申しました。その理由・根拠の一つとして，申し忘れたことをつけ加えさせて戴きます。ごく最近やった，調査の一つ[5]。これは，東大に戻ってきてからやったものですが，宗教系の大学で，宗教家を目指している学生さん，それから一般の大学の学生さんの両者を対象にしてアンケート調査をやったことがございます。両者を比べますと，精神障害者に対する偏見みたいなものは，宗教家を目指している学生さんの方が少ない傾向が認められました。ただし，精神病理学，あるいは精神病に関する知識，理解も，少し乏しい。ですから，偏見のなさというものが，知識の不足といいますか，その辺に根ざしたのかもしれないという危うさを若干感じたことがあります。その方達が将来宗教家になったときにどうはねかえってくるかということを若干気になるわけです。そんなこともありまして，私，癒しの問題が下手に世上を賑わした場合の恐さということを申し上げたいのです。癒しの効果というものを十分に承知した上で，ひねくれたことを申し上げさせていただきました。

5) 栗栖，佐々木，小野「精神障害に対する態度調査」，臨床精神医学21（12）：1945-1956，1992

中村：恩田先生，何かございますか。

恩田：終わりのほうをちょっとはしょりましたので，ちょっと付け加えたいと思います。カウンセリングというのは，クライエントが自己の可能性を発見し，自己実現していくのをカウンセラーが援助していくんだということですね。禅の場合は確かに自己の本性をつかんでそれを日常生活に生かすという自己実現があるわけなんですが，自己とその対象が一つになるというのは，それによって自己が超越している，自分の可能性が開いていくわけですね。それが対立した世界では閉じられて全然動かない。一つになったときに自分が広がっていって，自分を超越する。従って宇宙意識までひろがる。宇宙意識というのは，禅では仏性とか，真の自己といっているわけですが，最近トランス・パーソナル・サイコロジーやトランス・パーソナル・セラピーでは，ユング派とか，禅の影響を受けたり，チベット密教の影響を受けたり，シャーマニズムの影響を受けたり，そういう面で，個人的無意識をこえて宇宙意識まで拡大していく。そういうトランス・パーソナルなサイコセラピーを展開していっているわけです。そうなるとまた一つの世界にはいってきているんじゃないかと思います。それから，カウンセリングにおいても，仏教，禅においても大事なのは，一つはカウンセリングは他者受容という，ロジャーズは無条件に相手を受け入れる，無条件の肯定的な配慮というのを言っておりますが，これは禅では，対象と一つになるという世界ですね。自分以外の他と一つになる。それに気づくのが知恵である。一つだということですね。それに対して，人や生物に対して感じることを慈悲という。だから，知恵というものは，裏返しにすると，それは慈悲になるわけです。慈悲というのはこれはひとつの気づきということでは知恵になるわけで，これは愛とか，仁とかに相当します。そういう様な面があるわけで，例えば，自分がからっぽであると全てが自分である。そうなると，人が困っていれば自分も困る，なんとか助けてあげたいという思いがでてくるわけでありまして，そういう面は他者受容，愛である，慈悲である。こういう風につながっているわけで，これは根本的に大事なものです。ですから最初に慈悲があるのです。結局他者受容というのは自分を受容して初めて他者を受容できるわけで，それは切り放せない存在で，これは禅でいうサマーディすなわち，三昧の体験において，じっくりと味わうことができるわけで，そういうのが日常生活にでてくるのが禅的な生き方です。これはムスターカス先生という方もそのような体験を，自分がそのようにしておられるといっておられるんですね。ですから子供の心を自分の心にし，自分がからっぽになると相手の気持ちがつかめるわけで，そういうことをおっしゃっていました。最後に指導するものと指導されるものとの関係について，ちょっと話しておきたいと思います。一番大事なのは，カウンセリングでは共感的理解，対象と一対感を感ずる。禅の場合は，一体感ですから，相手の気持ちが，ものでも，感じ取れるわけで，そういう面が非常につながっていると思います。人格というものを，禎の場合は，お師匠さんとの深いつながりで，曹洞関係では面授といって，お弟子さんがお師匠さんからいろいろ親しく仏法の奥義を受ける。それから，臨済系では独参といって学人が室内で師家に公案の見解を呈して点検を受け

る。それがちょうどカウンセリングでは，カウンセラーとクライエントとの信頼関係，あるいは，ラポートというんですか，そういう関係で人格の深い面で交流が始まって，そこでクライエントが自分で気づいて成長していく。あるいは，問題を自分で気づいて解決していくことになります。また禅では，修行者が禅的体験を深め，あるいは，悟りを開いて，成長していく。こういう共通する面があるかと思います。以上でございます。

中村：クスマノ先生は。

クスマノ：結構です。

中村：そうですか。それでは，一応これで各先生方のスピーチを終了致しましたので，これからフロアの皆様方に参加いただきまして，ディスカッションに入りたいと思います。それでは，どういうことでも良いのですが，スピーカーの先生方にお尋ねになりたいことがあれば，挙手をおねがい致します。それから名前とですね，もしも所属がありましたら所属をお願いいたします。それではおねがいいたします。

フロア：東洋大学哲学科に所属しております渡辺と申します。特に佐々木雄司先生にお聞きしたいんですが，そもそも健康という状態と，治療，癒しが必要であると判断するのは誰であるかと，いったことであります。なぜそういうことをお尋ねするかといいますと，ある社会では，例えば，精神病に限らせていただきますが，その同じ状態であっても，恩田先生がおっしゃいましたけれど，それを受容する社会と，これは現代社会だと言っていいと思いますが，なになにというレッテルをはることによって，ある意味でそれを排除するシステムの社会とでは，その関係が全く違ってくると思うんです。これは，ミシェル・フーコーが確か言ったと思うのですが，ヨーロッパにおいてもルネッサンス以前の場合は，例えば精神分裂病は，我々普通の人よりも神に近い存在だという風に畏怖されていたと言っています。それが病人とか看護婦とかに隔離されることによって，ある意味で犯罪者的なイメージと重なり合って，今日まで至った。これは現代において，ロマン・ロレインが言った言葉で，神秘家と精神分裂者は同じ海の中にいるんだけれども，神秘家が海を泳いでいるのに対し，精神分裂者の方は溺れているんだという風な言葉をいったと聞いたことがありますが，それとちょっと関連するんじゃないかということですね。そういう見方をする人と，そうでない人の，システムの違いについて，それともう一つなんですが，先ほど，それとちょっと関わりがあるんですが，登校拒否児のことをおっしゃいましたが，例えば，現代社会はこのように人間を排除あるいは，疎外する要因があって，それが元々の生命のあり方である全体的な営みと，どこかで相入れないところがある。システムとしての社会と相入れないために，そういう行動が起きてきた。個人ではなくて，社会の歪が個人に反映していることがあるということだと思います。だいたい宗教というのは社会全体を癒すという面があると思うんです。そういうシステムと社会との関係をお聞きしたいと思います。

佐々木（ゆ）：とっても難しくて本質的な質問をして下さいました。これは旧くて新しい問題といっていいと思います。おっしゃるとおり，周りとの関係ということが，ことに精神衛生学の場合には問題になってきます。そこで私さっきおみせしたスライドの中で〔図1〕，覚えてらっしゃいましょうか，扇子みたいのが書いてあって，まん中に本人がいて，その周りに家族がいて，隣近所がいて，一番外側に文化をおいておきました。その文化の内側に制度をおきました。そういうものに規制されていろんなものが動かされています。最近はやりの言葉で，疾病と病気，ディズィーズとイルネスという表現があります。身体的基盤がはっきりしたものを疾病，ディズィーズといって，それに対し，社会的文化的に認識されるものを病気，イルネスとよぼうという動きです。私はあまりその分類は好きではありませんが，そういう分類がかなりはやっているというのも事実だと思います。こうした周りとの関わりは，健康と疾病，正常と異常というふうなものを論ずるときに，常に，ことに精神科の場合には，関わってまいります。WHO の健康の定義が，「社会的に，身体的に，心理的に」とありますが，あれも精神医学の場合にはなかなかうまく当てはまりません。周りにとってウエルネスのものが，本人にとってウエル・ビーイングでない場合もあります。それが私達の悩みの深いところ。登校拒否にしても，いろんな問題があります。日本では昭和30年頃から，登校拒否の問題が起こってきたと記憶します。最初はなんでもかんでも学校へいかせようという治療方針をとっておりましたが，そのうち，むしろ学校へ無理に行かせない方がいいんじゃないか，不登校をそのまま認めた方がいいのではないかという動きも出てきまして，登校拒否の治療方針も人によって千差万別となってまいりました。それから，レインなんかを筆頭とする反精神医学の立場，かなりもっともな考えもございます。私ども時々，精神科の医者がいなければ，精神分裂病はいないのではないかとさえ思うこともありますけれども，しかし，文法がなくても言葉というものはあったわけですし，病気はあったんでしょう。さっきのバイブルの中に出てきた，あの病気の診

断はなんなのかとクスマノ先生のお話をうかがいながら私なりに考えていました。臨床精神医学というものは残念ながら病院という枠の中，診察室で治療しようとする傾向があります。しかし，コミニュティ・メンタル・ヘルス，地域精神医学というのは，社会全体に対して何かをやろう，むしろ，社会を変えて行こうという動きでございます。そういう意味でとても補足説明しやすい質問をして下さいましてありがとうございます。

中村：それでは次にどなたかいらっしゃいませんか。

フロア：駒沢大学の杉田と申します。宏幹先生に一つご質問ちょうだいしたいんですが，先ほどのシンガポールのヒーラーの件，スライドで拝見させていただいたんですが，あの時ヒーラーは憑依現象に入るようななにか状態をつくるのか，それとも，通常の状態でも常にそういう治療をされるのか，この辺を一つお答えいただきたいのですが。

佐々木（こ）：私の説明で一つ大事な点が落ちておったと思います。今先生がご指摘の点です。あれはトランスに入っているんです。通常の意識ではなくて神様に変わっているという建前をとります。男性と女性とではずいぶん違うんでありまして，男性はトランスにはいる場合に，人格から霊格・神格にかわる時，苦しむんです。すごいんですね，15分ぐらいかかります。女性はすっと入れるんですね。だから，何人か見ておりますけれど，女性の方は外から観察した限りでは，がたがた震えていないんですが，ただしあの人の場合は足が若干震えています。ですから，しゃべるのも第一人称で，「感天上帝が，あなたのトアパーヨ病院まで行って」，というようなことになりますと，まん前に像がありまして，その像に入っている神の霊が彼女に入っているという形をとります。

フロア：ちょっと私が以前にですね，東南アジアの人の憑依状態を見たことがあります。普通の家庭の主婦なんですね，医療行為に入るときにですね，呼吸ですね，呼吸とそれからタバコの一種だと思いますが，全くタバコを吸わない女性がですね，たくさん吸うんですね。その内に眼付きが変わってきて，それで憑依状態に入るんですね。その治療は非常にショックな治療だったですけれど，ちょっとここではお話できないようなですね。先ほど恩田先生が変性状態にはいるときに，繰り返し，らせん状態ではいっていくといった，非常にいいお話をちょうだいしたんですけれども，それと相関するようなおんなじ様な状態，そういう変性意識の状態に入るには，何かプロセスがあるのでしょうか。

佐々木（こ）：私気づいているのに２点ございまして，女性の場合だとさっき恩田先生がおっしゃったことと関連がありますが，瞑想なんです。手をこうやってじっと像を見ている間に震えてくるんですね。片一方は，ドラや太鼓やすさまじいロック音楽みたいなものをつくって，そのあいだに徐々にトランスになっていく。つまり，静かに精神集中してなる。これは女性ですね。男性の方は，どんどこどんどこやりましてですね，そのあいだに神霊が入っていくということ。二様あると思いますが，ただ今先生がおっしゃったような例で私がみたのは，マレーシアの村でですね，ドゥクン（Dukun）という神がかりをする人たちがおって，これはタバコを使うんです。そしてそのタバコの煙を吸っている間に徐々にバイブレーションがでてくる。当然のことでありますが，神観念とか，憑依観念の文化的基盤によってかなり違ってくるのだと思います。

中村：どうもありがとうございました。

フロア：横浜国立大学で心理学を勉強している学生です。カウンセリングはどこか宗教的だという意見もあります。佐々木雄司先生に特にお聞きしたいことなんですけれども，私の周囲で，カウンセリングがまだ日本で一般的ではないのは，そういうサポートが必要な人は，新興宗教に走るからではないかという意見があります。また，カウンセリングに行くこと自体に宗教的な悪いイメージ，つまり，いかがわしさなどを感じているという意見があります。そこで，宗教的な癒しとカウンセリングとの違いをお聞かせねがえないかという事と，また，一部のいかがわしい宗教とカウンセリングのイメージがだぶってしまうことについてのマイナス点の，そういう２点についてお聞きしたいんですけれど。

中村：佐々木雄司先生と恩田先生の両方にお聞きしたほうがいいんではないでしょうかね。

フロア：それでは佐々木雄司先生と恩田先生にお聞きします。

佐々木（ゆ）：とても難しい問題だと思います。その前にさっきタバコで云々という問題がございましたけども，韓国のムーダンを訪れたことがあります。その一人がクライエントと接する時だけ，タバコを大量に使っておりました。なるほど，これがけむにまくというのかなあと感心いたしました。それで今のご質問。カウンセリングと宗教の問題。この場合の宗教の定義如何もございますし，それから，カウンセリングの定義にしても，カウンセリングプロパーのことをおっしゃっているのか，それともももっと広く精神療法という意味でおっしゃっているのか，両方の定義がはっきりしないのでわかりにくい点もあります。しかし私自身，昔，ヒーリングの問題

をとりあげている時に，ヒーリングといわゆるサイコ・セラピー，心理療法とは類似点があるということは感じておりました。最初まず入信するという段階，それは精神療法では受容という段階に相当するとみておりました。いろんな苦悩を，ぐちこぼしと，あるいは告白というんでしょうか，受け入れてもらって，そこで，our group とか，ceremonial friends とかができてきます。その次が第２段階。いかがわしい宗教であっても，どういった信仰でも，病気がそれなりに説明されます。特に精神科関係ではなかなか病気の原因など説明しにくいのもあるので，病院では納得できなかったものの説明があります。説明のつかない悩みというのは，不安につながります。その説明は，感謝の気持ちが足りないというのでもいいのでしょうし，大宇宙との関係という教理の説明でも構わないわけです。不安の解消になります。そこでいわゆる教理との，あるいは教団の幹部，小さいところだったら教祖との一体感，連待感というものが，第２段階では生まれてくる。シンポの先生が，一体感，連帯感ということをお話になりましたが，そういった段階が出てくる。その次は第３段階。今度は，いわゆる転移に相当するもの。それから強烈なコンバージョンみたいなものがそこで生まれてくるんじゃないか。コンバージョンと精神療法でいう洞察，インサイトがかなり近いものかもしれない。その次はどういう生き方をするのかという段階。精神療法の場合には，かなりご自分で見つけていくのでしょうが，どうも宗教の場合には，その生き方は，教団の教理，教え，そういうものに感化されるようで，その辺の段階は明らかに違ってくると思います。とはいっても，精神療法にしても，私達の仲間も，それぞれかなり癖がありまして，精神療法を受けた人と話してみますと，あいつの治療を受けているんだなとか，あいつくさいなとか，なんとなくセラピストのイメージが浮かんでくる場合もあります。そうなると，宗教の場合とどこがどう違うのかと，首をひねることもございます。

もう一度強調させて戴きます。偏見というものがじゃまをして，カウンセリングといいますか，精神科の治療といいますか，それが日本でうまくいかないという風に考えております。偏見の打破というものが，私ども精神衛生に携わっているものの大きな宿題といいますか，最大の課題。そのはざまにこそ，いかがわしい信仰治療がはびこっているのです。そこで本日は，私は，やたらに癒しの問題が表面化することの危険性みたいなものを敢えて話した次第でございます。

恩田：私もカウンセリング，あるいは心理療法の問題をやっておりますので，ちょっと話させていただきます。カウンセリング，心理療法の問題ですが，例えば精神分析といってもいいんですが，その人の深層の深い，あるいは変性意識状態といいますか，そういう状態は心身が非常に動きやすい状態になる。動きやすい状態の場合には，まず，心身の緊張や情動が解放されるとか，いろいろ問題点が出てくるわけですね。そこのところが非常に難しいところで，中には，それをうまく処理しないために症状が出て悪化します。場合によっては問題で，精神分裂病で，例えば，自律訓練法でも，これはケースがあるんですが，自殺したという例もあるわけですね。そういう面で治療というのはなんでも良いかというと必ずしもそうではないので，非常に危険な状態をつくることもあるのです。というのは，クリティカルな状態というのはどのようにもされるわけなんです。マイナスのものを抑えて，プラスの方向に持っていくというのが治療者なんですね。ですから，治療者自身だってケースを引き受けた場合には，病気を起こすこともあるわけです。そこでスーパーヴィジョンといって，スーパーヴァイザーがいて，指導してもらわないと，まずクライエントよりセラピストが心身に異常をきたすわけですよ。いわゆる風をひきやすいとか，ほんとにおかしくなることもあるわけですよ。それは未熟なような状態ですけれども。だから，普通，精神療法，あるいはカウンセリングで，その治療という過程と，それから，宗教的な，禅定とか瞑想ということで，メディテイションというのは，いわゆる心身を動かす状態ですからパーソナリティの弱い人にとっては非常に危険があるわけです。ですから，それでもって解放はしたは良いけれども，コントロールしていない場合は，危険です。例えば，分裂病の場合，それからうつ病のような場合，そういう場合に例えばメディテイションをやって，非常に問題を解放しちゃって，それで治めきれなくて症状を悪化してしまって，いろいろ問題が生ずる場合があるわけですよね．治療者でもそれがあるんですね。ですから，そういう問題を心得ていてやらないといけない。最近，カウンセリングとかセラピーという形で，いろいろ宗教的な面を取り入れて概念を，広げてくるわけです。それで，例えばその方が，精神医学や臨床心理学的な知識が十分には無くて，場合によってはマニュアルみたいなものがあって，短期間にそのやり方を習得する。それでその治療のメカニズムを十分に知らないで，インプットだけで覚えていて，アウトプットは出るわけです。ところが，そこに，期待しないところにクライエントが動いちゃうわけです。そういう場合にどうにもならない問題が生ずるわけです。ですから，こういう人間の問題については，かなり人間についての

深い知識が，できれば科学的な知識とそれから体験ですね。それから，場合には，先輩のスーパーヴァイザーというか指導者に，しっかりした指導者について指導を受ける必要があります。自分一人でやるのは大変ですよね。お釈迦様でも6年の苦行をやって，立派な指導者がいたんだけれど，それでもね，十分じゃなかったわけなんです。やはりいい指導者について，指導を受ける。それから，専門的な，科学的な知識や治療法の指導を受けながらおやりになるといいと思います。要するにカウンセラー自身もセラピスト自身も危険な状態にあるんだということです。

中村：どうもありがとうございました。次どなたかいらっしゃいますか。

フロア：今日はどうもありがとうございました。埼玉県から来ました田中といいます。私は，癒しということに興味があるんですけれど，自分がそうですので。ただ今日はイエス・キリストの癒しのことをお聞きしたかったんですけど。50%位納得できました。私の一番の最大の，自分ができるということは，癌の痛みを止めること，熱を止めること，これが私の自分の力なんですけど。でもどうしても，この宗教と癒しという専門的なお話を聞きたくてここに来たんですけれど。今，恩田先生が，宗教家の方は，何が治る，何が治る，といっても科学的じゃないとおっしゃいましたが，それは絶対嘘だと思います。私はそれなりに科学的に，心理的に，一生懸命勉強しました。だから，宗教家の方が，科学的に根拠が無いから，ひどくなって病気になるというのは，それは言い過ぎだと思います。今日は黙って帰るつもりでいたんですけれど，恩田先生が今そんなことをおっしゃいましたので，それはおかしいと思いました。

恩田：実はこういうことなんです。専門的な，科学的な知識とか，技能を経験して，それから臨床経験をしている，たとえば精神医学の先生方とか，それからあるいは臨床心理学の方とか，そういう方もいろいろな体験的な意味でいうと，不十分なんです。それから宗教的な体験をされている方もそういうことがあると思うんですね。それで中には有能な方で，場合によっては，お医者さんが診断されて間違っていて，宗教的な指導者の方が正しい診断をして正しい治療したことを知っております。ですから，それについては，どちらがというのではなくて。自分は神様とかにもちろんご指導いただいているわけですが，やっぱり自分は人間なんです。それを受け取ること，それから，今おっしゃったように，自分でやるというのではなく，大きな力の上で自分がやらしていただくということで，治療させていただいているわけですね。そいうのはお分かりですね。

フロア：はいそうです。

恩田：ですから，自分の力ではないわけですね。その一連の大きな力が自分を介して，やらしていただくわけです。場合によっては，プロフェッションですね。使命を受けているわけですね。そういう意味でお互いに自分は謙虚でなくてはならないわけですね。そういうつもりでやらせていただく。ですから，例えば手当をする場合に，自分が治しているんだというのではなくて，自分の背後の大きな力，全体の，これは神といってもスピリットといっても良いし，あるいは宇宙意識といっても良い，そういうお力をいただいてやらしていただく，そういうつもりでないと自分がその病気を引き受けてしまって苦しむことになる。要するに，いわゆる「おふりかえ」ってご存じですね，それによって体をこわされて，命をちぢめられた方があるわけです。それはそういう一つの形で，それは神様やあるいは背後霊，あるいは大きな宇宙意識そういう方を通してやらしていただく。そういうつもりで，いつも研究なり勉強させていただく，あるいは指導者について指導を受ける，そういうつもりの場合は，例えば，いろいろ宗教的に身につけられた方も，いわゆる科学を身につけられた方も，同じなんですね。ですから，そのつもりでやらなければならないということを私は申し上げたんですね。科学者の方が正しくて，宗教的な人は間違っていることもあれば，その逆もあるわけです。そういう意味で何れにしても，絶えず勉強しそれから自分よりも上の方から指導を受ける，場合によっては眼に見えない存在からご指導をいただきながらやっていくと，こういう意味であるということが私の言いたいところなんです。お分かりでしょうか。

中村：どうも。この問題はこの位にさせていただきます。

フロア：帝京大学からきました江藤と申します。キリスト教の立場からたってみてもらいたいんですけど，英国の評論家が，宗教心なき教育は知識ある馬鹿者をつくるということを言っているんですけれど，僕は哲学っぽい考え方をするんですけれど，宗教イコール教育イコール真理という考え方をもっているんですよ。それで，一つ聞きたいことなんですけど，この世で一番大切なことといいますか，この世で一番良いこととは何かということを，キリスト教の立場から聞きたいんですよ。僕なんか学生なんで，それを基礎に勉強していきたいし，僕は意外に本を読んだりするタイプなんですけど，読み書きする信仰といいますか，まだ浅いもので助言をいただきたいというか，そういうものをいただきたいんですけれ

ど，よろしくお願いします。

クスマノ：はい分かりました。私はカトリックの司祭ですけれど，本職はカウンセラーです。原則として助言を与えないんですけど。キリスト教的立場からいえば，明らかにこの世の中はどこか狂っているわけですね。悪があっていろいろ問題があるんですね。それはキリスト教的な説明でいうと，罪があるからですね。どこかに。そして，他の宗教については話しませんが，キリスト教の立場から考えますと，人間は罪があるもので，人生の唯一の目標といいますか，救われるということなんですね。だから具体的に，その救いはどういう風に得られるか，それは，人間それぞれ立場がある，道があると思いますが，それは，あなたの言い方でいいますと，人生において一番大切なことは何かという，最終的にそれにつきると思います。だからさっきの私の話では，３つの癒しの場面の３番目は，その罪の許しです。それはカウンセリングとか精神療法とか，それを越えている次元の話なんですね。だから何回か宗教とカウンセリングの関係の問題が出てきましたけれども，キリスト教的な立場からいうと，罪の許しとか，罪とか，救いとか，そういった話をすると，すでにカウンセリングの領域を越えています。逆に，そういう言葉とか，そういう考えとか，そういうことが出ない限り，カウンセリングの領域にも入れるし，いろんな分野で取り扱うことができるということだと思います。

フロア：僕が聞いた話によりますと，世の中で一番大切なことは，仏教的な考え方だと思うのですけど，親を喜ばせること，ご先祖を喜ばせること，世の人を喜ばせること，この３つが信心の核というんですかね，これについて勉強していっているんですけれど，そういうことです。ありがとうございました。

中村：それでは次の人。

フロア：横浜市立大学の精神科の岸本と申しますが，先ほど哲学科の方と佐々木雄司先生がディスカッションをおやりになりましたけれども，分裂病でも，そううつ病でも良いんですが，最近はかなりいろんなことが分かってきておりましてね，分裂病でいいますと，脳の代謝の画像が全部分かるわけですが，それによりますと，例えば，前頭葉が働いてないとか，そういうことがいろいろと分かってまして，体の病気なわけですよね，その結果として，例えば前頭葉が働かなくなれば，関心がなくなったり，社会的な，例えば，職場で働けなくなるとか，だから，コンピューターなんかできなくなったりしますけれど，そういったこと，普通にやってきたことができなくなるということが起こってきて，要するに薬を使って治療をすれば良くなって，関心がでてくるし，コンピューターの操作もできるようになるというようになっているわけですね。だから人間の体の面でそれなりの癒しが必要で，それなりの専門があって，それで助ければいいんじゃないかという風に思うんですね。私今日の宗教と癒しということで，人間の存在というのはそういった身体的な存在だけでなくて，心理的な存在でもあるし，精神的な存在でもあるわけですが，クスマノ先生にお伺いしたいんですけど，先ほど，身体的な癒しと精神的な癒しと，それから霊による癒しですね，３つのキリストが行った治療というか，精神的な癒しのお話をされたんですけれども，最後の例が霊による癒しの例なんでしょうか，キリスト教でいう霊による癒しというか，そのことをもう少し詳しくお伺いできたらと思うのですが，私もカウンセリングをいろいろとやっておりまして，その概念というか，どういうことを霊による癒しとしていらっしゃるのか，その辺をもうちょっと知りたくて質問させていただきました。

クスマノ：はい，わかりました。私の説明がそういえば不十分だったと思いますが，先ほどの聖書の話は霊的な癒しという言い方を使いましたが，それは霊による，という言い方と違うような気がします。霊的な癒し，つまりこれは，伝統的なキリスト教的な見方なんですけれども，３世紀，４世紀辺りの教父達ですね，人間にはその３つの次元があるといったんですね。身体的，精神的，霊的ですね。その意味で霊的という言葉を使ったんですね。先ほど説明した救い，罪，許し，その次元の話なんですね，霊的。霊による癒しというものは，現代のキリスト教では，あちこち癒しの集会が開かれる，そして人は祈ったりしているわけですね。そして，場合によって，癒しの効果が現れるんですね。その場合，多くのキリスト者はその癒しはいわゆる霊を通して行われたというわけです。つまり，その霊はこの世に現れている神の力だと。だから少しその２つを区別する必要があると思いますが。あくまでそれはその信仰者の人たちの信仰の一つの面です。その辺ですね。霊があるということは。霊がこの世に働きかけるというところです。

フロア：日本語でいうと一般にたましいによる癒しというか，そういった概念ですか。

クスマノ：そうですね。はい。それが似ていると思います。

フロア：どうもありがとうございました。

中村：もう余り時間がないものですから，もう一人だけ。

フロア：松岡と申します。いま文教大学で臨床心理の

勉強をしています。質問は，クスマノ先生にお願いしたいんですけど。今前の方がおっしゃったこととちょっと近いと思うんですけど，霊的な健康ということをおっしゃったと思うんですけど，霊的な癒しとかそういったことはある程度知ってはいるんですけれど，どういうことが霊的な健康なのか良く分からないので，それをまずお教え頂きたいということです。それと，先ほど，こちらの先生のお答えの中で，罪の許しというのは，宗教的な次元以上のものだということをおっしゃっていましたけれども，以上というのは，なんか全然違う，もっと高い次元のことだという様なことをおっしゃったと思うのですけれど，私は今４年で卒業論文の関係で，罪悪感というものがかなり出てきているんですね。それでちょっと参考にできたら伺いたいんですけれど，一つの考察の参考にしたいので，ぜひこの件に関してお願いします。

クスマノ：上智大学では卒論の締切は来週ですけれど，私も11名指導してますので，十分に同情できますからできるだけのことを致します。第一の質問，霊的な健康は何かということですが，これまた改めていいますが，信仰の世界観を持っている人に限っていわれることなんですね。だからもしかしたら信仰を持たない人にとってはこれが意味のない話になるかもしれません。その霊的な健康ということは，私と神との関係は，正当な関係であるということです。私はできるだけ神に与えられた使命を果して，キリスト教はイエス様を通して教えられた神の掟にしたがって生活している。それが霊的な健康になると思います。ただこれは信仰者の立場から話していることなんですね。２番目は，私が宗教的以上のことといったつもりはありませんが，精神的な次元を越えている場面，次元といったつもりです。それはつまり，そういった罪の許しは，人間は，あってもなくても身体的には，害はないかもしれません。精神的に別に問題にならないかもしれません。ただ，信仰の世界においては，まだ完全に健康であるとか，完全な状態になっているとは言えないんです。だから信仰を持っている人にとっては，その神との関係は，正しくやっているということは，一つの使命であります。その使命を果たしていなければ，私，まだ，完全な健康な罪悪感のない人間になり得ないということなんですね。そして普段精神療法において言われる罪悪感は，その関係をよくあらわすんですね，キリスト者の場合には。だから，場合によっては精神療法の場面でそれを取り扱う必要があるかもしれませんけれども，信仰がなければ難しいところだと思います。

恩田：ちょっと僕も言わせて頂きます。仏教者の立場から。実は，今，先生がいわれた，罪の許しの場合は，結局，これは，心理学的にはいろいろ問題があります。霊的にも，そういう問題があるんですけれども。私は心理学的には十分問題になりうると思っているんです。例えば，コンプレックスの場合には，エディプス・コンプレックスってご存じですね，それから阿闍世コンプレックスという場合があるわけです。あれは心身症で心理学的に十分解明できるものだと思っているのですが。仏の力で治ったというのではないわけですよね。しかし，仏というのは私自身が仏である，本質的にはね。ですから，そういう面から言えば，自分の治療力で治るわけです。あれは阿闍世王に心の問題すなわち，コンプレックスがあって，皮膚病を起こすわけですよね，そして，そのコンプレックスが解消して，心が浄化されたときに，その皮膚病が治るわけです。お父さんを実際に殺して，お母さんも殺そうとした，そういう罪の意識に会ったときに，許しがあるわけですが，それはお父さんからまず許される，いわゆる霊的な面もあるわけですね，亡くなったけども許されるわけですね，それでお母様からもいわゆる看護というのがありますしね，それで，すまなかったというように，懺悔をして，それによって癒されるわけですね。本当に，皮膚病がなおってしまうわけですね。あれは，心身の相関の問題で，十分臨床心理学的に精神医学的にも説明できるわけです。しかしこの場合，クスマノ先生の場合には，いわゆる信仰を持つ人のという条件を付けておられるわけで，そういう条件の場合は，これは大事なことなんですね。だけども，もう一つは無条件に考えられる面もあるんではないかと，そこには私が興味がある。関心があるところですね。宗教と科学の接点の問題がそこにあると思います。大いに一つ勉強して下さい。私も勉強したいと思います。

中村：もう少し続けたいのですが，ちょうど４時になりましたので此処で一応打ち切りたいと思います。しかし，どうしてももう少し話を伺いたいと希望される方は，直接手紙を出して先生方にお尋ねになると良いと思います。此処で，まとめをいたしたいと思います。

佐々木宏幹先生は，（１）ヒーラーとクライエントが共通の世界観，宗教観，死生観を持つこと。（２）誠実さ，共感，暖かさなどの，ヒーラーの個人的資質。（３）クライエントの治癒への期待。（４）家族や周囲の人の支持。これらの要因がそろったとき効果的な癒しが生ずると述べられております。

佐々木雄司先生は，現代の医学が抱えている問題として（１）医学の限界の問題。（２）医療に心や魂が欠けていること。（３）サービスとしての医療の問題，を挙げ

ておられ，これらに対する対応策として，患者の「生活の場」つまり，職場とか，学校とか，あるいは，地域とか，それらの中で健康の問題に責任を持っているキー・パーソンを，当該患の応援団につけることと，患者本人が，医療の上手な活用を工夫することを挙げておられます。

恩田先生は，禅定の状態は外界と対立がなくなって一つになった状態（三昧）で，この状態では，十分に心身が動けるようになり，心身の機能が十分に働き，治癒も働き，生産的・創造的に活動ができるようになる。その状態で，いわゆる悟り，つまり，自他不二，主客一如の真の自己が洞察できると述べておられます。

クスマノ先生は，キリスト教における癒しは，便宜的に身体的癒し，精神的癒し，霊的癒しの三つに分けることができる。しかし，これらの三つは実際は分けて考えることができないもので，イエス自身は人を癒すときは常に，全人的に患者を捉え癒していた。つまり，患者の存在そのものを対象とした，ホリスティックなアプローチが必要であることを強調されました。

癒しということは，単に身体的疾患の治癒のみでなく，自己あるいは自己の身体を，ありのままに受け入れることもあると考えます。しかし病める身体をあるがままに受け入れることは，そうたやすいことではありません。そのような場合，本日うかがった，佐々木宏幹先生の４要因，佐々木雄司先生の「生活の場」における応援団としてのキー・パーソンの存在，恩田先生の自己をありのままに受け入れる，自他不二，主客一如の禅定の状態，クスマノ先生の患者の存在そのものを対象とした，キリスト教における身体的，精神的，霊的なホリスティックなアプローチは，ありのままに自己の身体を受入れることにいろいろな，有益な示唆を私どもに与えてくれると思います。

本日は長時間シンポジウムに参加頂きありがとうございました。これでもって閉会といたします。